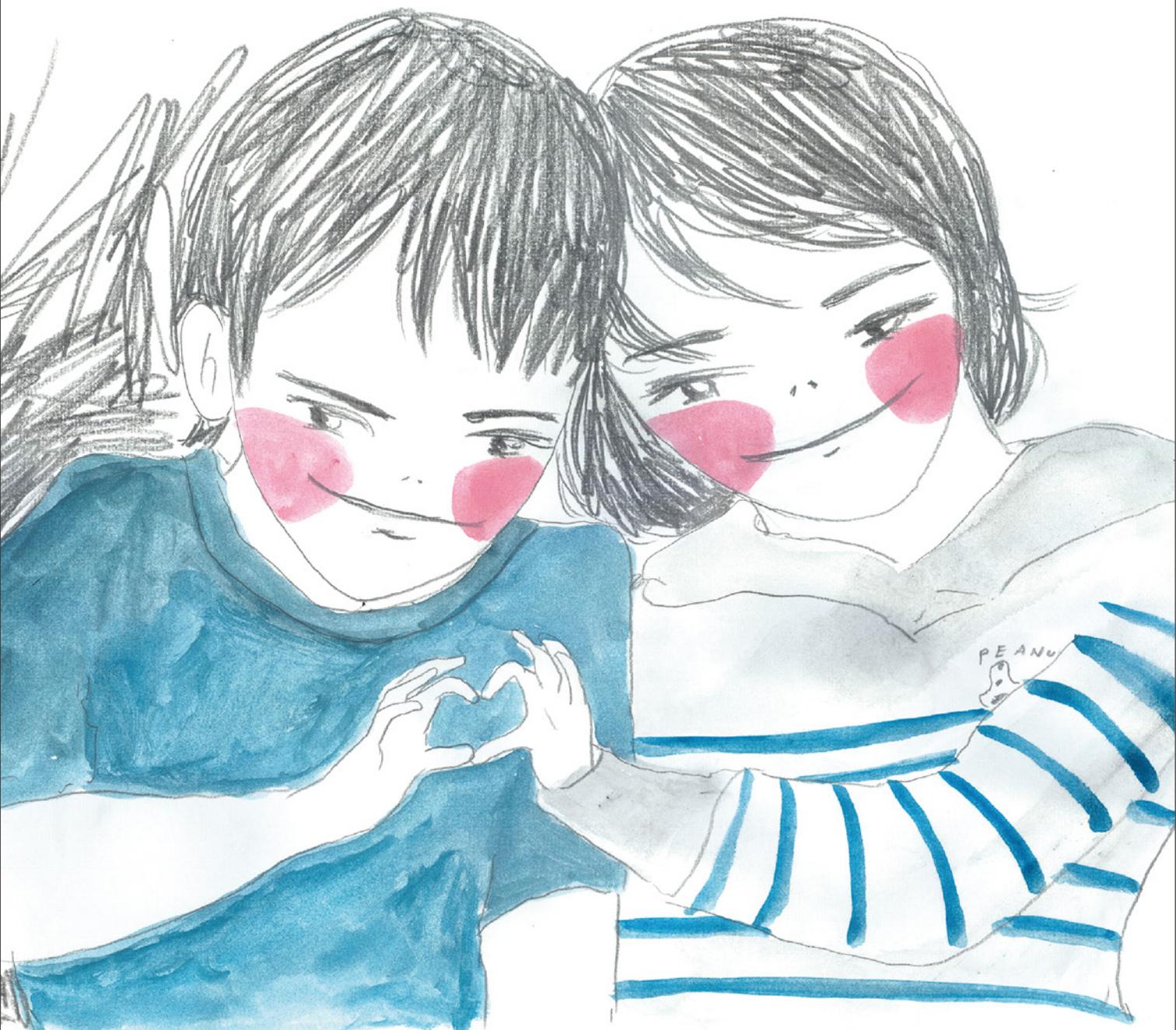


想像を広げる

TURN JOURNAL

SPRING 2020 — ISSUE 03



特集

交流と表現

文化でつながる。未来とつながる。

TokyoTokyo
FESTIVAL

2015年に始動したTURNは、今年度で5年目を迎えました。複数年間の展開を通して、それぞれのプログラムやTURNの運営体制はさまざまな変遷を遂げています。

初年度より交流を行う、知的障害がある人を対象にした支援施設やひきこもり、セクシュアルマイノリティのほか、高齢者支援、障害者のきょうだい、そして聴覚や視覚に関わる障害など、その関係領域も年々広がっています。こうした関係性の広がり、多様性のある社会を考えるなかで、さまざまな実践を通して自ずと生まれてきました。本書の言葉の集積は、その広がりを感じさせてくれるものの一つだといえるでしょう。

参加アーティスト、交流先そして運営スタッフにおいては、継続して参加している人から、参画して間もない人までさまざまな形があります。TURNのとらえ方や向き合い方は、それぞれ異なることを良しとし、TURNに多彩な色合いが加わったいま、変わることに変わらぬことをそこはかたなく教えてくれるのが、言葉の集積ではないか。そうした考えとともに、『TURN JOURNAL』では、出会い方や伝え方の試行錯誤を重ねながら発信していきます。

今号は、TURNが当初より大切にしている「交流」に焦点をあて掘り下げました。TURNのこれまでと今のまなざしを通して、これからの創造的な実践をともに考えていくための一助となれば幸いです。



CONTENTS

- 02 **巻頭対談** 3万年前、海を越えた人間に学ぶ。
「違い」でつながること
海部陽介 [人類進化学者] × 日比野克彦 [TURN 監修者]
- 08 **特集** 交流と表現
- 08 活動日誌 写真 = 富田了平 / 金川晋吾
- 14 「交流」について語る TURN アーティスト座談会
- 18 アーティストと施設に聞いた、交流ってどうですか？
- 24 TURN の「ことば」
- 25 町田と世界をつなぐ糸 クラフト工房 LaMano と 五十嵐靖晃 [アーティスト]
- 28 **エッセイ** 〈アート×哲学対話〉がひらく共生の新たな可能性
文 = 梶谷真司 [哲学者]
- 30 **TURN フェス5** 写真 = 加藤 甫
- 36 **活動日誌から** TURN フェス5 文 = 伊勢克也 [アーティスト]
- 38 **エッセイ** きょうだい児という挑戦 文 = 藤木和子 [弁護士]
- 40 **REPORT** 見えない人 & 聞こえない人と一緒にめぐるツアーから
石川絵理 [NPO 法人 TA-net 事務局長] / 関場理生 [ダイアログ・イン・ザ・ダーク アテンド] /
瀬戸口裕子 [手話通訳士]
- 44 **エッセイ** 不可能性の可能性 文 = 小山田 徹 [美術家]
- 46 **ARTWORK** | 松本 力 [アニメーション作家]
- 50 キルメスの土 布下翔碁の日記から
- 52 **REPORT** TURN in TUCUMAN, BIENALSUR
- 56 **交流先の声** 八百屋や子ども食堂から、
「生きていて楽しい」を広げるために
近藤博子 [気まぐれ八百屋だんだん店主]
- 58 **連載** もうひとつの TURN を考える (後編)
傷つきが、出会い、循環する場をひらく
文 = 長津結 一郎 [九州大学大学院芸術工学研究院助教]
- 61 桃三ふれあいの家 今号の絵手紙
- 62 **REPORT** TURN ミーティング
- 64 表紙のストーリー 交わるアート
小林エリカ [作家・漫画家]

巻頭対談

3万年前、海を越えた人間に学ぶ。 「違い」でつながる「こと」

私たちの祖先はどこから来たのか——。その問いから「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」を始動した、海部陽介さん。TURNの監修を務める日比野克彦とともに、つくることへの衝動、異文化への興味、アートのこれからについて語りながら、人間の根源に迫る。

構成・文 杉原環樹 写真 阪本勇



人類進化学者

海部陽介

TURN監修者

日比野克彦

つくることへの衝動と、「違い」を超える基盤

日比野 海部さんとお話ししたとき、「日本列島に最初に渡って来た人たちは、なんでわざわざ危険な海に出たのだろう。島が見えているならわかるけれど、水平線しか見えないのに。その衝動を知りたい」と話されていましたよね。現代の芸術は、制度や使う道具によって美術や音楽のように分類されるけれど、僕は「つくりたい」「伝えたい」という基本の衝動は同じだと思っんです。芸術の一番の面白さは、モノや市場的な価値ではなく、その衝動。それはきつと、昔の人が海に出た気持ちとも関係するのではないかと。

海部 その気持ちを知りたくて、近年、台湾から与那国島に原初的な丸木舟で渡の実験航海プロジェクトを行ってきました。今、その成果を本にまとめているのですが、実はクロマニヨン人の芸術から記述が始まるんです。クロマニヨン人は、アフリカで生まれ、世界中に拡散したホモ・サピエンス(現生人類)のうち、ヨーロッパにいた一集団です。彼らはラスコーの洞窟壁画のようなすごい造形を残していますが、アジアにはつい最近までそうした痕跡がなかった。だとしたら、僕らの祖先は一体何をやったんだろう、というところから始めようと考え始めました。

もともとアフリカにいたホモ・サピエンスは一つの集団で、おそらく、言語的にも文化的にもそんなに多様化していなかった。それが拡散してあちこちで変化していくのですが、そこで同時に、芸術であるとか、わざわざ海に出るとか、寒い場所に行くとか、おかしいことが出てくるんです。

日比野 ホモ・サピエンスから始まった。

海部 それ以前の人類もいろいろやってはいるんですが、ホモ・サピエンスになると、少し次元が変わるんですね。芸術も海に出ることも、普通の生き物はやらなくていいことです。食べて生きて子どもを残すのが生物の原理なら、不要じゃないですか。だから最近思うのは、ある意味で余計なことを一生懸命やるのが人間なんじゃないかと。その衝動の正体はわからないけれど、僕らのなかにはそうしたものがあつた。もちろん「衝動」という一言では済まされませんが。

日比野 よく、人はなぜ絵を描くのかという問いに、「人間って物をつくっちゃうんです」という言い方をするんです。TURNで世界各地の障害者や高齢者の施設に行くのですが、焼き物とか織物とか伝統的な工芸品はどこにでもあるんですね。たとえば人は、何かグチグチグチしたものがあつると、こねたり丸めたりしたくなる。世界中同じ。砂を触ると、お団子をつくっちゃう。

海部 子どもが砂場で最初に始める行為ですね。

日比野 「丸める」とか「紡ぐ」といった基本的な行為が同じで、よく飽きないなと思うけれど、飽きないんです。生産性どころではなく、心地良い「飽きなさ」があるからやり続ける。文様や素材に当然地域性はあるけれど、行為自体にはあまり地域性ってないんですよ。

海部 「つくる」という行為自体は、たとえば石器はもっと歴史が古くて、原人の時代からつくつていま



日比野克彦(ひびの・かつひこ)

アーティスト、東京藝術大学美術学部長・美術学部先端芸術表現科教授。岐阜県美術館館長。日本サッカー協会社会貢献委員会委員長。1958年岐阜県生まれ。東京藝術大学大学院修了。1982年日本グラフィック展大賞受賞。1986年「シドニービエンナーレ」参加。1995年「ベネチアビエンナーレ」参加。2003年より「越後妻有アートトリエンナーレ」参加。2010年より「瀬戸内国際芸術祭」参加。2013～15年「六本木アートナイト」アーティストディレクター。2015年度芸術選奨文部科学大臣賞(芸術振興部門)受賞。2015年より「TURN」の監修を務める。

に行き、アミ族という先住民族のコミュニティやお祭りをらせてもらいました。

海部 あんなに近い場所にあるのに、僕らは台湾のことを知らなすぎるんですね。

日比野 そう思いました。僕自身、「16民族もあるのか!」と、衝撃を受けたから。

海部 台湾では、旧石器時代から新石器時代に移った6千年くらい前に、おそらく大陸から新しい人々がやってきたんですね。現在の原住民の文化は、そこにルーツがあるのだと思います。

日比野 そうした文化の掘り起こしも、TURNでやりたいことの一つです。同時に、モノをつくることの意味や、人を人たらしめているものとは何かということも考えていきたい。人工知能の発達で人間の仕事が奪われると言われたり、物理的な世界ではなくヴァーチャルな世界が拡張している現代において、社会のなかの芸術の役割はそこにあるのではないかとも思っています。

海部 一つ思うのは、アートのあり方は一つではないということですよ。たとえば、さきほどの台湾の原住民の芸術と、日本の現代の芸術は違うでしょう。僕の印象では、前者の表現は彼らの民族的なアイデンティティ



海部陽介(かいふ・ようすけ)

人類進化学者。1969年東京都生まれ。東京大学理学部卒業。東京大学大学院理学系研究科博士課程中退。理学博士。1995年より国立科学博物館に勤務。現在、人類史研究グループ長。2019年、「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」を完結。著書に「サピエンス日本上陸 3万年前の大航海」(講談社、2020年)、「人類がたどって来た道」(NHKブックス、2005年)、「日本人はどこから来たのか?」(文藝春秋、2016年)、監修に「我々はなぜ我々だけなのか」(講談社ブルーバックス、2017年)など。

より深い「人間」や「多様性」の発信のために

日比野 海部さんの実験航海の出発点は台湾でしたが、今度、台湾でもTURNのプロジェクトをすることに。台湾に原住民が16民族(※台湾で認定されている数)もいるということ。台湾というと、台北や台中のような中華文化圏のイメージがありますが、今回僕は初めて東海岸

僕らはほかの地域の造形も「面白い」と感じます。「違う」だけではないのです。そういう基盤が、僕らにはあるんです。

海部陽介

と密接に絡んでいて、そこから始まっている。一方で日本の場合、個々のアーティストは、それぞれ違う動機で作品をつくっている。もちろん、これはどちらがよい悪いの話ではなく、場所や時代によって芸術の意味が違うということです。

現代の作者は絵を描いたら他人に見てほしいと思うでしょう。でも、クロマニヨン人はきつとそんなことを思っていないんですよ。あんなに人目につかない場所に描いているんだから、有名になろうなんて考えていない。芸術という行為は共通していても、動機や背景はそれぞれの状況で変わる。そういう視野で見ると、現代の日本で芸術が展開し得る方向のヒントも得られる気がするんです。

日比野 展開というのはどのようなものでしょうか？

海部 アミ族の場合は、動機がある意味でわかりやすいわけですね。「これを残したい」という伝統文化がはっきりとある。でも近代の国家ではそれが失われ、「では、何を表現しようか」というところから、たぶん始まるんですよね。そこには迷いもあるけれど、選択の余地もある。そこで僕がよく思うのは、科学研究や学術研究で得られたものをアーティストが表現してもいいと思うんですよね。そんなコラボレーションがあれば、もっと面白いものを表現できるんじゃないかな、と。

日比野 海部さんもそうですが、研究者は確かさを大切にされている気がします。アーティストは、ひょっとしたらこうかもしれない、ああかもしれないというのを、自由に想像して、発信していく役割かなと思うんです。そういう両者の役割が合致すると、世の中に伝わりやすい部分もある。



3万年以上前に、海を越えて日本列島にきた最初のホモ・サピエンス。その人類の壮大な航海を再現し、2019年に成功したプロジェクト「3万年前の航海徹底再現プロジェクト」。

モノをつくることの意味や、人を人たらしめているものは何か。現代社会における芸術の役割はそこにあるのではないかとも思っています。

——日比野克彦

海部 もちろん、自由に表現するのもいいのですが、僕はその一歩先に違うあり方があると思っていて。おっしゃったように、僕らが求めるのは真実なんです。当時の人たちの姿を正しく理解したい。だから慎重なんです。でも、そこから分かってくる世界観を、論文とは違うかたちで表現するのもありだと思っんですね。つまり、アーティストが研究の領域まで踏み込んで「人間」を理解し、僕らにできないかたちで表現する。それをやったら面白いと思います。

たとえば、アミ族の芸術は大事にしたほうが良い。あれは、かつてこんな人たちが、こんな暮らしをしていたという証ですから。それが失われると、なかったことになってしまう。TURNがアートの多様性をテーマに掲げると言ったとき、それをこうしたレベルで伝えられたら素晴らしいと思うんです。人類学者は、まさに人類学的な意味を語ることで、そこに協力できます。そうした深い理解をアートの解釈に組み込んでいけば、もっと人間に迫れると思うんです。

「らしさ」はどこから生まれるのか

日比野 さきほど海部さんから、「人間は違う地域の文化を面白がることができる」というお話がありました。

一人ひとりの「らしさ」、つまり多様性を面白がれるというのは、まさにTURNが目指すところですね。でも、ホモ・サピエンス以前には、その基盤がない時期もあったわけですね。それを人類が得られた理由というのは、人類学的に分かっているんでしょうか？

海部 それは、本当にわかりません。人間の進化では、ある瞬間、それまでの生物の原理を逸脱することがあるんです。生物というのは、基本的には子孫を残して増やしたほうが勝ちという世界ですね。そのなかで、自然界が複雑化して、我々のような生物が生まれてくる。同時に勘違いしてはいけないのは、生物の進化は、ただ一方向的に複雑化し、頭が良い方向に進むわけではないということです。複雑化の一方で、必ず原始的な生き物が一緒に残る。単純でも生きられるのが生物の世界なんです。そのなかで人間はとてもユニークな方向に動いてきたんですね。

日比野 僕もそうだったのですが、若いアーティストは、おそらくみんな他者と同じものばかりとくなく、思っているんですよ。でも、憧れる作家はいるから、複雑な気持ちでその作家と近い作品をつくるけれど、人から見ると案外「自分らしさ」が出ちゃったりしている。実はぜんぜんコピーできていないわけ。僕も若い頃は欧米に憧れたんだけど、海外で初めて展覧会に出たとき、向こうの人から「日本的だね」と言われてショックを受けた(笑)。つまり、何が広がっていきとどきに、どうしてもズレが生じる。それが「個性」なんじゃないかと思うんです。

海部 オリジナリティへの焦りというのは、わかる気



2017年にペルーで展開したTURN。自閉症や知的障害をもつ人たちが通う「セリト・アスール」で、日本の藍染の糸とアルパカの毛糸を用いた交流が行われた。奥で両手に糸を巻いているのが日比野。

がします(笑)。僕は、今回の実験航海プロジェクトはうまくいったと思っっているんですけど、その最大の要因は、僕一人でやっていないからなんです。海流、地形など、それぞれのことはその道の超一流に任せたいんです。一人でやらず、伝統に学んで徐々に自分の色を付けていく、というので良いと思うんです。

むしろ、歴史をきちんと理解した上で、自分がどの位置にいてそれをどう生かせばいいのかわかっている人のほうが強い、と僕は思っています。アートの領域はともかく、いまあるアートだけがすべてのアートでは絶対ないわけですから。

僕ら人類学者は歴史を復元したり、人間の多様性を調べたりするのが仕事。人類学者と芸術家は、もっとそういうレベルで協働したら面白いと思います。

日比野 ぜひ、一緒にやりましょう。

海部 はい。ぜひよろしく願います(笑)。

僕が大事だと思っるのは、昔の人を自分と同じ人間として見るということです。昔の人に対する見方は二つあって、一つは単純な人たち、とする見方。もう一つは、「昔の人はすごく現代人は堕落している」と、やたら崇めてしまう見方。でも、僕も会ったことがないから直感に過ぎませんが、昔の人も同じ人間です。むしろ、同じ人間が原始的な技術しかないなかで海を渡ったことがすごいわけです。いまは便利な道具に囲まれているから忘れちゃっているだけで、現代人もコンパスや地図、GPSなしに星や風を見て海を渡ることができている。そういう潜在力は、僕らのなかにもあるのだと思っ

LITALICO ジュニア 所沢教室 × 飯塚貴士

写真は、2019年8月9日、児童発達支援 放課後等デイサービス「LITALICO ジュニア所沢教室」にて、人形映画監督の飯塚貴士さんが人形劇ワークショップを行ったときの様子。この日の飯塚さんの日記には、「短い時間のなかでたくさんドラマが生まれた」と記してある。その約1カ月後には、完成した映像の上映会を行った。日記によると、上映会で観客席が湧いたときでさえ、無理をしている子供がいないかを心配していた。飯塚さんが常に、子供たち一人ひとりに目を向けている姿が伺える。

特集

交流と表現

2015年から続く「交流プログラム」を通して、TURNではこれまでさまざまな出会いがあった。その記録の一つに、アーティストが施設やコミュニティで交流したときに綴る「活動日記」がある。交流先での、小さな気づきや思考などの率直な言葉。そこに綴られた、積み重ねられる関係や、出会いの所作、表現への模索は、これから私たちがともに生きていくための一助となるかもしれない。



写真=富田了平

活動日記

文 飯塚貴士

2019年8月9日
合体生物の活躍

ワークショップ2日目。

1日目とは、ほとんど総入れ替えに近いメンバーで迎えた。1日目にできた登場人物を生み出した子供達の意思を継いで撮影に挑む。

結果として、一発勝負のアドリブ満載の撮影の中、みんな最高の芝居と登場人物の設定を尊重する思いやりを発揮してくれた。

ひたすら戦い続ける者、仲良く1日を過ごす者、太陽に飛び込む者。短い時間のなかでたくさんドラマが生まれた。

他の友だちに見られながら撮影することが難しいことだとはわかっていたので、なんでもウエルカムな雰囲気を作ろうと尽力したが、恥ずかしくて最後まで参加が難しかった子がいたのは反省だった。

とても楽しく、勉強になる時間を過ごせたが、課題も残ったように思えた。

2019年9月13日
上映会を開いてもらった

先日のワークショップの上映会を開いてもらった。参加した子とその親御さんと一緒に教室の壁に投影された完成映像を観る。

ところどころで笑いが起き、とても和やかな雰囲気だったが、笑われてると勘違いしてしまった子がいなかったか少し気になる(取り越し苦労だったら良いな)。

出来上がった作品に満足げな子もいれば、もつとがつり取り組みたい！と決意を新たにしている子もいた。で、いつかまたやりたいなと思った。時間もできたら一人ひとりに合わせてばつとやったり、じっくりやったりできたら良いなと思う。

特別養護老人ホームグランアークみづほ

× 岩田とも子

アーティストの岩田とも子さんは、品川区の特別養護老人ホームに月1回のペースで通っている。交流する中で、ほとんどの利用者が品川区出身と聞き、思い出話を聞いたり一緒に散歩したりしながら、まちの地図をつくり始める。まずは目にした風景の色を紙に塗り、それを地図のパーツとした。その色紙を利用者と一緒に切り貼りしていると、ある女性が「昔は1日2000枚の海苔をつくっていた」と話した。彼女は元海苔屋だった。写真はその約1カ月後の様子。四角い色紙は海苔だったが、丸い色紙はお煎餅がモチーフ。お煎餅も、利用者の思い出話に度々登場する。岩田さんにとって、こうして高齢者と一緒に過ごす出来事そのものも、地図のパーツなのかもしれない。



写真：富田了平

活動日誌

文：岩田とも子

2019年11月12日 四角い色紙と海苔

特別養護老人ホームグランアークみづほ。訪問4回目。

前回散歩中に集めた色紙を、絵具を使って色紙にしたものを持っていった。集めた植物で押し花にしたものは淡い色に変化していたのでそれもノートに挟んで。月一の訪問ということもあって私が一体誰なのか、入所者さんがどれだけ認識しているかわからないけど心なしか久しぶり、という感じで迎えてもらえた気がする。前回の写真や押し花を見せると「そうそう、あれね」という具合にさらに思い出してくれた。色紙をみせるとまじまじ眺めてくれる方もいて。

今日は初めて一緒に手を動かしてみようと思ったのでまずは試しに紙を切ったり貼ったりしてみることになった。そこで手助けとなったのが前回、駅前の海苔屋さんでみせてもらった。かつての品川、海苔の天日干し風景写真。品川育ちの入所者さんの中に色濃く残る風景の1つだ。

紙を四角に切るのには簡単そうだしちょうど良い。同じテーブルにいた4人に私が混ざる形で話を始め写真をみせると何の風景なのかすぐにわかってくれた。家で海苔を作っていた方は「朝、2時に起きて仕事するのよ。1日2千枚」。具体的な時間と枚数まではっきりと教えてくれた。四角が綺麗に並んでいるのが絵的に魅力的でこんなふうには四角い紙を貼ってみませんか？と提案してみたがまだ手は動かない。まずは四角い紙をつくることにして、見本に私が紙を切ってみた。海苔のように2千枚は作れませんがねえなどと冗談をいながら紙とハサミを渡すと少しずつつ手を伸ばしてくれた。見本に切っ

た数分後「一度やって見せてよ」と頼まれてはしばらくしてまた頼まれて3回ほど。小さなタイムトリップを繰り返す。やるのが定着してきたと思えば今度は効率よく切り出す方法で四角作り職人に徹してくださって。ハサミを使うのが難しい方には細く切り出した紙を渡し手で千切って四角を作ってもらった。私は真四角のイメージをしていたけど「海苔は横長よ」と教えてもらって途中から気持ち横長にした。

増えてきた四角をみて1人が紙を貼ってみようかなという感じになったので糊を渡すと気ままに貼り絵をはじめた。私と他2人は海苔のように四角を並べて貼ってみることにして切り出した四角は隣り同士になくなった。

同じ方法であっても選ぶ色合いが違って「あなたのはこんな色合いね」となんとなくその違いをお互い見比べてみたり。もう1人の方は糊で紙を貼ってというところで少し苦勞し、並べて貼るというよりも張り合わせていくような絵になっていた。なぜか緑色ばかりを選ぶのでなんとなく葉っぱのようなものが広がって、さいごに濃いピンクが欲しいというので渡すと2枚ほどピンクを貼っていた。完成した頃には2時間が経っていて四角からできた作品は5つ完成した。

次回はお煎餅の丸でやってみましょう、とか次はどんな色の紙がいいかな、とか少し相談をしてこの日の交流を終えた。帰り際、「あなたがいないと心細いわ！」と突然声をかけられ驚く。この紙貼りの間、彼女の中に一体何が起きていたんだろう。何か思い出すことがあったのかな。交流の道のりで急に彼女に腕をつかまれたようで、これから我々が冒険にでるかのようになんか気分になった。地図を作ろうという企てがあったが交流の軌跡、出来事そのものが地図のパーツを作り出しているのかもしれない。

2019年5月22日
ラッパー、
福祉ホームさくらんぼへ行く。

私、渋谷区生まれ渋谷区育ち、メガネのやつは大体友達。ラッパーのマチーデフと申します。

先日、豊島区立心身障害者福祉ホームさくらんぼに行ってきました。福祉ホームさくらんぼは、豊島区在住15歳以上の心身障害のある方が家族からの支援が困難になった場合に備えて、家族から離れた日常生活の体験をおこなう施設です。この日は居住者4名と他数名の利用者さんが施設で過ごしておりました。

美智子さまのようにゆっくり丁寧に言葉を話されるおしとやか系女子、Kさん。知育玩具で遊ぶことが大好きで、細部にまでこだわりを見せる芸術家肌のAさん。某野球チームの大ファンで、毎週野球観戦に出かけているIさん。DVDを割ろうとしてみたり（絶対割らないらしい）、窓から飛び降りようとしてみたり（絶対飛び降りないらしい）、職員さんや僕の気を引こうと色々なドッキリを仕掛けてくる演技派かまっちゃちゃん、Yさん。などなど個性あふれるメンバーと交流してきました。

次回は何か一緒に遊べるものを持って行こうと思っています。

福祉ホームさくらんぼ × マチーデフ

2019年5月、ラッパーのマチーデフさんは初めて「福祉ホームさくらんぼ」を訪れ、そのときの所感を日誌とラップにまとめた。写真はその半年後、11月に行われた施設のお祭り「さくらんぼ祭」での一幕。マチーデフさんは左から3番目、中央ではメンバーが感極まってスタッフに抱きついている。マチーデフさんと一緒にスタッフたちがつくったオリジナルラップ「粒ぞろいのさくらんぼたち」と「Dear 代田さん」を歌い終わったあとのことだ。このラップは、さくらんぼ祭の3カ月前に「TURNフェス5」でも披露。「福祉ホームさくらんぼ」を舞台にしたラップを一部アレンジしたものだ。職員は忙しい業務の合間に、ステージに向けて練習を重ねたという。



写真=金川晋吾

以下、所感ラップ。

『ラッパー、
福祉ホームさくらんぼへ行く。』
作詞IIマチーデフ

豊島区福祉ホームさくらんぼ
毎日個性が集まるぞ

Kさんは丁寧でおしとやかです
Aさんは細部にまでこだわーる

Iさんはガチのスワローズファン
Yさんは演技派かまっちゃちゃん

十人十色 色々なキャラ

ラッパーも少しは馴染めたかな？

ARTIST DISCUSSION

「交流」について語る TURNアーティスト座談会



マチーデフ × 岩田とも子 × 池田晶紀

[ラッパー]

[アーティスト]

[写真家]

TURNで交流プログラムに参加する、3名のアーティスト。関わる期間や交流先も違うが、交流プログラムでの出会いは3人にどのような影響を与えたのだろうか。初めての交流の印象から、自身の変化、多様性とは何かまで、普段は関わりあう機会のない3人が「交流」について語る。

構成・文=杉原環樹 写真=池ノ谷侑花 [ゆかい]

ほかでは得難い出会い

——池田さんは写真家、マチーデフさんはラッパー、岩田さんはアーティストとしてTURNに参加されてきました。施設との交流を通して、どのような気づきがありましたか。

池田 2015年から「社会福祉法人きょうざれんリサイクル洗びんセンター（※1）（以下、洗びんセンター）」と交流していますが、そこで働く人たちがとにかくカッコ良く、ポトリイトを撮ったり、一緒にプロジェクトをしたりしています。たとえばその一人の高橋正浩さんは、30年以上、手書きの高速道路の地図を更新している。本人的には作品の意識もない日々のルーティーンですが、どこかで人に見せたい思いもあって、「だったら、ひらいてみようよ！」と持ちかけて、僕がドキュメント担当で、一緒に展示を行いました。写真家は人に会うのが仕事ですが、TURNはそんな自分に、出会いから何かをつくることの大切さをあらためて考えさせてくれた場所ですね。

最近では、もう一つ関わっている「シユレ大学（※2）」のメンバーと洗びんセンターを訪れ、働くことをテーマにしたプロジェクトも行っていきます。いろいろな取り組みをしながら感じるのには、施設のなかに（自身の施設を）オープンにしたい人がいることの重要性。中の人々が、「こんな素晴らしいのに、みんな知らない」と思っている。僕の役割は、それを外に知らせることだと考えています。

マチーデフ 僕はもともと、葛飾区立石のまちで老若男女に話を聞いて、それをラップにする「立石ラップのど自慢」というフェスを開いていて。同じようなことをTURNでもできないかと声をかけられ、参加しました。TURNフェスでは4〜5カ所に話を聞き

に行き、施設の人の思いをラップにしてみました。実は当初は、成果物としてのラップの質についてはプレッシャーがあったんです。でも本当は、あまり重要じゃないですよ。というのも、施設において利用者さんと職員さんは、ある意味で親子のような関係になっている。自分もそうでしたが、親と距離が近いからこそ反発したくなるもので、純粋な友達というわけにはいかない。そのなかで自分の役割は、利用者さんの「友達」に全力でなることなんだ、それだけでいいんだ、なんて今は気楽に考えています。

池田 ヒップホップ的に言えば、「ブラザー」になることだと。
マチーデフ まさに「マイメン（※3）」です（笑）。もともとラップって、その人のアイデンティティや個性を大切に音楽だから、TURNとは相性がいいと思っています。それに僕自身、社会の中で企業で働く大多数の人とは違う生活を送っているの、その意味で利用者さんに共感もありました。

岩田 訪れるだけで交流になる、というのはわかります。私は大学時代から、道に落ちている石のような自然物を観察・収集して、何かに見立てる制作を行ってきました。TURNには大学卒業後に参加しましたが、最初に訪れたのがアルゼンチンの施設だったんです。その際、現地で見せるために日本文化の伝統的な礼法の研修も受けたのですが、「ハレ」と「ケ」で言えばハレに当たる大切な領域に自分が関わっていいの、戸惑いもあった。でも研修の先生から「そもそも地球の裏側から来るあなたとの交流自体が、現地の人にはハレなんだから」と言われ、その言葉に支えられました。

私には、そもそも自分の作品のためにいろんな場所に滞在し、制作を助けてくれる人を探すような、作家としての凶々しさがあるんです。でも、TURNと

関わってからは、自然に発生した交流にはどんな意味があるのかをより考えるようになりました。池田さんも言うように、そこではほかでは得難いような人たちとの出会いがあった。そういう人に出会うと、私も何とかして形に残せないかなと思います。この感覚は、TURNに参加してより強く感じるようになりました。



池田晶紀（いけだ・まさのり）

写真家。1978年神奈川県横浜市生まれ。1999年自ら運営していた「ドトラックアウトスタジオ」で発表活動を始め、2003年よりポトリイト・シリーズ「休日の写真館」の制作・発表を始める。2006年写真事務所「ゆかい」設立。2010年スタジオを馬喰町へ移転。オルタナティブ・スペースを併設し、再び「ドトラックアウトスタジオ」の名で運営を開始。国内外で個展・グループ展多数。アーティスト三田村光士里とのアートユニット「池田みどり」としても活動。

池田 実は交流している作家が、いちばん贅沢な機会をもたらしていますよね。

「違い」が嬉しくなってきた

——マチーデフさんから利用者さんに対する共感という話がありました。池田さんと岩田さんにもそうした感覚はありますか？

池田 正直に言うと、交流を始める前は施設に対して近づくにくさも感じていました。でも、実際に訪れてみたら、社会のほかの場所よりもむしろ楽だったりする。写真家やアーティストは、基本的に世界に対して「よそ者」として関わる存在。そういう部分が響き合うのかもしれない。それは本当に、会ってみないとわからないことでした。

マチーデフ 交流先で意外だったのは、利用者さんのキャラクターを職員さんも含めてみんな面白がっていたこと。たぶん、一般的には彼らのことを「笑ってはいけない」という先入観があると思うんです。当然、馬鹿にする笑いはダメだけれど、現場の光景を見て「そうだな。何で個性として捉えてなかったんだろう」と感じた。そこにわりと早く気がついたら良かったです。

岩田 私も、交流先はすごく心地いいです。交流をしていると、家族とか友達のような自分の身近な人たちの小さな違いに気づけるようになって、すごく嬉しさを感じるようになりました。異文化交流は、実は日常の至るところにあると思えるようになると、生活が楽しくなる気がしますね。

マチーデフ 障害のある方を見るとき、以前はなぜだかわからないけれど身体が硬くなる感じがあった。それが今は、ぜんぜん構えなくなりました。軽くなった

「あわい」の場所を生み出す

——最後に、「多様性」について考えていることを聞かせてください。



マチーデフ

ラッパー、作詞家、ラップ講師。東京都渋谷区生まれ。1997年にラップを始め、オトノ業Entertainmentのラッパーとして数多くの作品をリリース。2014年にソロアルバム「メカネデビュー」を発売。また、アイドルのラップ指導やCMソングの作詞、テレビ番組の監修を務めるなど、ラップクリエイター、としても精力的に活動中。毎週、複数の専門学校で授業を行う「ラップの先生」でもある。2019年、13曲入りのフルアルバム「メカネシーズン」をリリース。

感じがあります。

池田 ずっと一緒に交流している写真家の川瀬一絵さんも同じことを言っていたなあ。でも交流している施設が、たまたま相性の良い施設だったのかもしれないだよね。説明はつかないんだけど、その偶然は大事かもしれない。

マチーデフ TURNと関わりのある交流先は、個性を認めていこうという理解がある施設だと思いますが、たとえば完全に仕事を「介護」に絞っている福祉施設もあると聞きます。もちろん現場は業務も多いですし、それが大事なのだと思いますが……。

池田 難しいですよ。少なくとも、施設の「ひらきたい」という思いに応えようとするのがTURNでは大切だと思う。そこで言うと、岩田さんは施設への溶け込み方がとても上手だなと思いました。交流を始めるとき、何を「入り口」と考えていますか？

岩田 私は制作のテーマが自然観察なんですけど、人のことも自然物として捉えられたら面白いなと思っています。山のなかでは、ちょっととした地形の差で違う植物が育ったりする。均質な草むらではなくて、そうしたいろんなものがゴチャゴチャあったほうが豊かなんです。しかも、それはつくりようとした違いではなくて、結果として生まれている豊かさ。私の場合、そういう自然に対する俯瞰的な視線を、人と接するときにも持とうとしているかもしれません。

池田 そのコントロールしない部分と、ゴールの成果物のバランスはどう考えていますか？ 実は最初からこう進むと見えているのか、迷いながらやっているのか。というの、TURNではプロセスに重点を置くものが多いけど、岩田さんは成果物が圧倒的に良いんですよ。

岩田 基本的にはずっと迷っているし、脱線します。今年から交流している「グランアークみづほ」でも迷子になりかけているのですが(笑)、発表する

マチーデフ 最近によく「ダイバーシティ」が大事で、人それぞれの価値を尊重しようと言われますよね。たしかにいろんな人の居場所はできていると思う。ですが一方で、より細分化されている側面もある気もしています。コミュニティが分裂して、たとえばSNSで自分がフォローした人のタイムラインしか見えていなかったり、同じ価値観の人が集まりやすい状況がある。でも、それだと視野狭窄（視野の狭さ）になって、異なる価値観の人に会ったとき摩擦や排除の気持ちが生まれてしまう。本来のダイバーシティって、コミュニティがどんどん乱立するだけではなく、お互いを認め合うことがないと生まれないんじゃないかと思うんです。そうしたなかでTURNは、その断絶、摩擦を緩和する役割を担っていくことができるんじゃないかなと。必ずしも本当の意味でわかり合わなくても良くて、違いがあることをわかることが大事なんじゃないかと思っています。

池田 とてもよくわかります。

マチーデフ 自分と似た価値観の人とつながりやすい今の社会は、自分を普通と思ひ込みやすい状況かもしれないですね。でも、現実の世界ですぐ隣にいる人が自分と違う考え方である可能性は高い。そのとき、違和感や自分にも向けられるかもしれない。その可能性はもつと意識できると良いのかなと思います。

岩田 私にも、違う価値観の人に出会ったとき、その人を無意識に避けたいという思いは生まれていると思います。でも、なぜ避けたいと思ったのか、それすらも不思議に捉えて一つのきっかけにできたらいんじゃないか。そういう違いを楽しむ気持ちが大切だと思います。

マチーデフ 楽しむことが大事ですよ。それを意識的にやらないといけないのが今で、今後世の中はどんどん効率的になると思う。でも、効率を求めると偶然性がなくなる。そこで自分と違う世界にボンと飛び込

機会があると、そこに向けて形にする熱が高まっている。でもそのとき、1回でまともなようとは思っていない。私は昔、映画監督になりたかったんですけど、いまの制作はシリーズの映画を撮っているのに近いなと。1回で完結しようとするのではなく、そのなかの1章、2章というつもりで臨んでいますね。



岩田とも子(いわたともこ)

アーティスト。1983年神奈川県生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。身近な自然物の観察・採集を通して、宇宙的なサイクルなどをテーマに制作する。発表形態は多様で、2012年に知を舞台に展開した「SILENT MIXER」、2014年に香川県栗栗局での自然物を採集するプロジェクト「栗局自然観察船」、そのほか自然学校の講師と共同で、森での子供ワークショップを定期的に行う。生き物に対する素材な視点。そこからはじまる学びと表現を大切にしている。

む偶然性を、いかに意識的につくられるのか。それをTURNでやりたい。

池田 今の話の延長で言うと、僕も岩田さんと同じく石が好きで、拾いに行ったり、見立てを楽しんだりするんです。そうすると、世界の見え方が変わるんですよ。一つの石に対しても自分の眼が肥えていき、景色の見え方が違ってくる。最近読んだ能楽師の安田登さんの「あわいの力「心の時代」の次を生きる」という本が面白くて、たとえば床の間とか縁側とか、日本のさまざまな伝統文化にある中間的な世界に、摩擦ではなく、外と内をつなぐ「あわい」の力を見るんです。安田さんは、そういう場所がこれからは大事と語っていて、感動したんですよ。

マチーデフ そういう「あわい」の力や場を生み出せるのが、アートやエンターテインメントかもしれないですね。一見、なくてもいいもののように見えて、実は大切な働きがある。

池田 そう思います。だから最近、人と人が出会う場をつくりたいと思っています。ビジネスマッチングとか、障害の有無ではなくて、人と人が交わる場所。それを進めたいと思っています。

1 「社会福祉法人きょうざれんリサイクル洗びんセンター」東京都昭島市にある、就労継続支援事業B型、就労移行支援事業を行う事業所。びんやリユースカップの洗浄、とうふの製造・販売、チラシセット作業、食品加工作業、軽作業、物品販売などの仕事に取り組んでいる。

2 「シュレ大学」不登校やひきこもりを経験した若者たちが主体となって、自分に合った生き方をつくり出す大学として東京都新宿区に生まれたオルタナティブ大学。2015年からTURNの交流先施設として参加している。

3 「マイメン(My Men)」親友・仲間という意味。「ブラザー(Brother)」とともに、おもにヒップホップにおいて親しみを込めて呼びかける言葉。

4 「グランアークみづほ」2019年、東京都品川区に社会福祉法人慈雲福祉会により開設された特別養護老人ホーム。

3



TURN

大久保由美

Yumi Okubo

[アーティスト]

①

ダンサー、モデル。1982年、東京都生まれ。大学在学中は文京区湯島にて寿司店を営業。卒業後、パフォーマンス作品に出演などしながら、ラテン音楽とダンス、飲食を提供するバーを経営。2013年閉店後、美術モデルとして活動。

②

アーティストユニット「ラ・マーニャとユミ」として、ミュージシャンであるラ・マーニャと世田谷区にある就労継続支援B型施設の上町工房にて、週1~2回のペースで交流を行う。音楽や踊りの好きなメンバーが多い上町工房で、ともに作業をしたりサルサを踊ったりしている。

③

Q1 交流先の利用者さんにユミを認識されているとわかると嬉しいです。駅の反対側のホームから声をかけてもらったり、私たちを「サルサの人」と呼んで、来るのを楽しみにしてくれている。素っ気ない素振りだと感じても距離が少しずつ縮まっているんだと思います。まあ、これってどんな人と人との交流でも共通しますけど。

Q2 軽く想像を超えてくる、ということだと思います。TURN フェスには初回からダンサーとして参加しており、「交流」のことは知ってはいました。自身の今までの経験から、普段出会わない方々との交流はこんなものかな、と想像で満足していました。実際には施設の利用者の方も職員の方も想像以上に面白くて、繊細で強いです。交流してみないと全くわからなかった。私の場合はミュージシャンと一緒に施設に行っているの、彼らの交流の様子や変化を身近に見るのも楽しいです。利用者さん、職員さん、ラ・マーニャ、そして私、すべての人が絡み合っ、そこに予定する以上の新しい変化が生まれています。

2



OTHER

上原耕生

Kouu Uehara

[アーティスト]

①

路上や商店街、廃校になった小学校、不法投棄地、団地等、いわゆる美術館やギャラリーという「制度」から離れた現場で、長期間のリサーチを行いながら現地での壁画制作やアートプロジェクトを行う。

②

2011年より茨城県北部にある、袋田病院（精神科）に非常勤職員として勤務。法人内にある「アトリエホロス」を拠点に、通院する患者さんの制作サポートや、2013年より年に一度職員とともに病院をあげて行う「アートフェスタ」の企画運営も行っている。

③

Q1 2011年の震災直後、私は袋田病院で造形スタッフとして働き始めることになりました。当初は医療福祉の資格も経験もない自分が、医療法人という専門職の中で何が出来るだろうかと悩んでいました。しかしあるときから、ほかの職員等とは違った立場だからこそ、ほかとは違う自分なりの視点でモノづくりを提案し、それらを実行する意味があるのではと、おぼろげながら考えるようになりました。

Q2 毎年秋に閉鎖病棟を開く「袋田病院美術館」というアートフェスタを行っています。その中では患者や利用者はもとより、看護師や精神科医やほかの職員らが各々に作品をつくって展示したり、バンドのコラボ演奏などをしています。そこでは患者や医療従事者という従来の、固定された立場や関係性を超え、一人ひとりが表現者として互いに尊重し合う、全く別のチャンネルの関わりが生まれています。

患者と医療従事者の役割を超えた関わり

1



TURN

飯塚貴士

Takashi Iitsuka

[人形映画監督]

①

茨城県牛久市でワッペンフィルムスタジオを立ち上げ、人形とミニチュアセットを用いた特撮映像を制作している。監督、脚本、撮影、美術、音楽、登場人物の声をほぼ一人で行う。近年では実写監督やフィギュア原型師との共作、ワークショップの開催など活動の幅を広げている。

②

2018年より障がい者総合サポートセンターさぼーとぴあ と LITALICO ジュニア所沢教室の2カ所に、月2回程度のペースで交流している。さぼーとぴあの利用者から聞き取ったプロフィールやライフストーリーをもとに、LITALICO ジュニア所沢教室の子供たちと即興で人形劇を作成するワークショップを実施。

③

Q1 交流先の皆さんは自分をちゃんと持っていて、楽しいときは目一杯喜び、悔しいときはちゃんと怒る。我慢や気遣いもできる限りしながらも、素直さを忘れない。お金や肩書き、容姿などで人を判断する凝り固まった価値観とは一線を画す、純粋で、でもちょっとくせのある皆さんにはっとさせられっぱなしです。見習って、あれこれ言われても自分の大切なものを守れる人間になりたいです。

Q2 お互いまず接してみることから始まる場所に大きな可能性を感じます。目標や企画が決まらなると何も物事が動き出さない昨今だからこそ、必然がなくとも純粋にコミュニケーションをとることから始める新鮮さに驚いています。戸惑いや難しさを感じる時もありますが、そんな過程からしか生まれ得ない新しい気づきや、豊かな変化があると信じて参加しています。

目的も企画もないところから始まる新鮮さ

アンケート企画

アーティストと施設に聞いた、

交流って どうですか？

アーティストにとって、福祉施設やコミュニティにとって、異なる人たちとの「交流」は、どんな変化をもたらすのだろうか。交流の現場を知るアーティストや施設のスタッフなど10人に聞いた、「交流と表現」の可能性とは。

項目について

① プロフィール

② これまでの交流活動

③ 質問

Q1 これまでの「交流」を通して、心境の変化や心に残っていることはありますか？

Q2 「交流」の可能性は、どのようなところだと思いますか？

TURN TURNの一環で交流活動を行っているアーティストや福祉施設・コミュニティなど

OTHER TURNの一環ではないが、福祉・医療分野でアートの取り組みを続けるところ。袋田病院（茨城）の上原耕生さんと、たんぼぼの家（奈良）の佐藤拓道さんに伺った

7



TURN

永岡大輔

Daisuke Nagaoka

[アーティスト]

①

記憶と身体との関係性を見つめ続けながら、創造の瞬間を捉える実験的なドローイングや、鉛筆の描画を早回しした映像作品を制作する。現在では、新しい建築的ドローイングのプロジェクト「球体の家」に取り組むなど、さまざまな表現活動を展開している。

②

2017年より大田区にある地域のコミュニティ八百屋、気まぐれ八百屋だんだんとTURN LANDを展開。普段はなかなか出会えない「大人」に話を聞いたりワークショップを行う「おとな図鑑」や、地域の子供たちと壁画を描く「だんだんHEKIGAプロジェクト」を実施。2019年より渋谷区障害者福祉センターはあとびあ原宿との交流を開始。

③

Q1 僕は交流がとても好きです。もちろん初めての訪問は、緊張します。そして非常に不安です。でも不思議なのは、そこにいて一緒に過ごすことで心がほぐれていくような感覚と出会います。それも、まだ数回も通っていないのに。そんなときは、僕は人がつくるエネルギーと出会っているのだと思います。人は植物とは違って、つくれるものはほとんどありません。唯一つくれるのは、エネルギーです。まちで出会うあらゆる「モノ」はほかの生き物がつくったものか、それらを再利用したもので覆われています。僕が訪問する先には、そういうエネルギーが「モノ」で隠れることなくそのままに転がっています。

Q2 交流は、「何かをするために実施するわけじゃない」ということを許容してくれます。それが意味することは、きっと僕自身が変わることを許容してくれていることなのだと思います。僕にとっての交流にある可能性の一つです。

6



TURN

新澤克憲

Katsunori Shinzawa

[ハーモニー施設長]

①

世田谷区にある就労継続支援B型事業所ハーモニーは、心の病を持ちながら暮らしている人が利用する施設。昼食を食べたり、作業をしたり、相談をすることができる。ともに支え合い、安心して自分らしさを発揮できるような場をめざして活動を行っている。

②

2015年からTURN交流プログラムに参加。2017年からTURN LANDを始め、これまでジェームズ・ジャック、サム・ストッカー、深澤孝史、ライラ・カセム、テンギョウ・クラといったさまざまなアーティストを迎えて交流し、地域に向けて施設をひらく活動を続けている。

③

Q1 海と島と多摩川のキラキラ光る水面と朗読（ジェームズ・ジャック）、白い壁と曲線と録音スタジオ（サム・ストッカー）、「がく」とウリアとハッピーワークスと焦げた寝袋（深澤孝史）、あふれる笑顔と紫とチェキと、ものものこと（ライラ・カセム）、コーヒーの香りとカルチャーダイブとヴァガボンド（テンギョウ・クラ）。

Q2 「交流」を契機に、私たち一人ひとりの中に、あるいは私たちを取り巻く世界と世界とのつながりの中に新しい脈が見つかること。抱えている葛藤を可視化し、無自覚であった構造に気づくこと。「結果」ではなく、愛おしい「プロセス」に出会うこと。待つこと。予定調和ではなくて、逸脱に可能性を見ること。

予定調和ではなくて、逸脱に可能性を見ること

5



OTHER

佐藤拓道

Hiromichi Sato

[たんぽぽの家アートセンターHANA副施設長]

①

奈良県にあるたんぽぽの家アートセンターHANAは、2004年に開設。障害のある人たちの個性をいかしながらビジュアルアーツやパフォーマンスアーツに取り組むスタジオ、今を生きる人たちの表現を紹介するギャラリー、コミュニケーションの場としてのカフェなどを運営。

②

演出家と定期的に演劇プログラムを実施するほか、2011年からはジャワ舞踏家の佐久間新氏を招き、月2回のダンスプログラムを展開。また2017年には「ダンスが生まれる回路研究プロジェクト」と題し、関わる人たちがどのように変化してきたのかなどの研究を行った。

③

Q1 「今、ここ」の時間を見つめ、時にその時間に身を委ねる大切さに気がしました。ケアをしていると、時間に追われる感覚があります。トイレ、入浴、食事。効率を考え、いつも「その先」の時間を見つめてケアをしている自分がいます。気を抜くと今もそうなりますが。私たちのダンスは即興です。「今、ここ」の時間を見つめることでダンスが紡がれ、その時間に漂うことで風景の解像度があがると思います。

Q2 これはアーティストと施設側のどちらかがという話ではなく、双方に起こることだと思うのですが、「交流」は「問い」を発見できる行為なのだと思います。異なる立場の人たちが交わることで見えない輪郭に気づき、新たな「問い」を発見できると思います。「問い」の答えは簡単に見つからないかもしれないけれど、「これで良いのか？」と問い続けることは大事なのだと思います。

「問い」を発見するきっかけに

4



TURN

齊藤 果

Konomi Saito

[放課後等デイサービス みかんの木 児童発達支援管理責任者]

①

2013年に開所した知的障害児・肢体不自由児の混合施設、放課後等デイサービス みかんの木で働く。「子供たちは、何に困っているのか」という視点で、子供たちが持てる力を十分に発揮できる手助けとなるよう、日々の支援にあたっている。

②

TURNサポーターからの紹介で施設を見学したことをきっかけに、2019年よりTURN交流プログラムがスタート。アーティストの今井さつきと月2回程度のペースで交流を続け、施設内の壁に皆で絵を描くなどの活動を行った。

③

Q1 TURNでの交流のお話を頂いたとき、「私たちにできる!? 役不足では!」と心配でした。みかんの木としてどのように対応し、取り組んでいけばよいのかわからないまま交流が始まり、私の心の声がアーティストさんに伝わり不安にさせてしまったかもしれません。そのような交流のスタートは、今ではかけがえのない出会いであり、かけがえのない人です。子供たちは待ち望んでいます。新世界の扉が開きました。

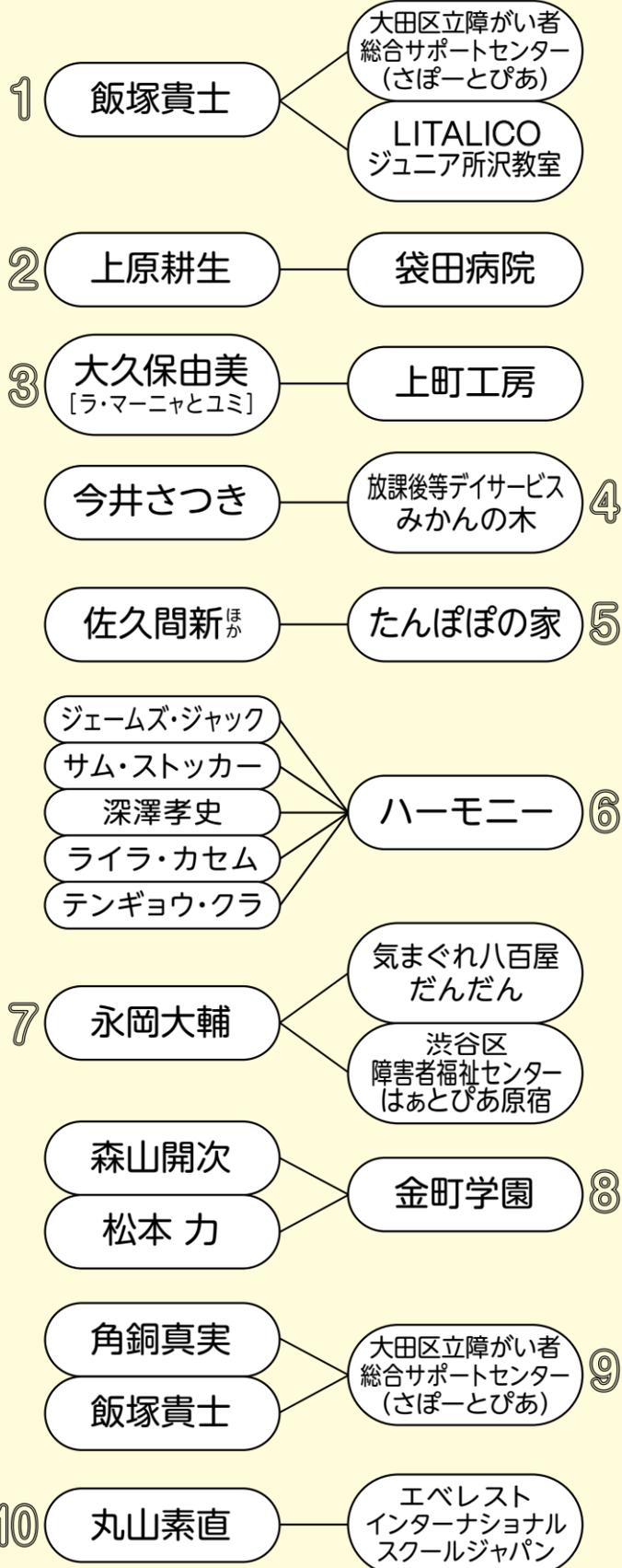
Q2 不安な物事が起こる際に必然的に生まれてしまう感情、経験のない子供たちは不安を抱えながら交流。経験がない、経験不足、それは子供たちに限らない不安なのだと改めて感じました。怖々と関わっていた子供たちが交流を重ね、深めていくごとに積極的な行動へと変化していきました。「安心＝何が起きて大丈夫」、そして安堵の表情への変化でした。経験の積み重ねが子供たちの可能性を生み成長へと繋がっていくのだと。新世界の経験でした。

新世界の扉が開いた!

この人たちに聞きました！

[アーティスト]

[施設/コミュニティ]



(2020年2月現在)

①プロフィール ②これまでの交流活動

10



丸山素直
Sunao Maruyama
[アーティスト]

TURN

①

空間を飾る大きな絵画から、パッケージや広告などのイラスト、デザインを手がけている。花や小鳥など自然をモチーフにしたものが多く、またワークショップデザイナーとして、幅広い年齢層や環境に合わせた表現活動を企画。教育機関や病院などの福祉施設で活動している。シンセサイザーバンドで国内外問わず演奏活動もしている。

②

杉並区荻窪にあるネパール人学校、エベレストインターナショナルスクールジャパンと、2019年から交流を開始。月1回程度のペースで通い、学校のイベントへの参加などを通して交流を行っている。

③

Q1 子供たちが元気いっぱい、人懐っこくて可愛いです。でも子供たちの溢れるパワーに対して建物のサイズが小さく、近所に住む方々との交流も、まだうまくいっていない印象です。ただものづくりを開催するだけでなく、地域全体を見つめながら、細く長く通い続けたいと思いました。ネパール語の、手を合わせながら「ナマステ」という挨拶が、温かくて嬉しいです。

Q2 同じ時間を共有して、ともに考えたり話したりすることで、だんだんお互いが見えてきます。楽しいことや嬉しいこともあれば、壁にぶつかることもあります。その都度考えながら、一緒に工夫していく力を育めば、「交流」しながら成長していくものです。そしてその成長は、心の豊かさにつながっていくと思います。

同じ時間を共有して、一緒に前に進む

9



前田 斉
Hitoshi Maeda
[大田区立障がい者総合サポートセンター (さぼーとぴあ) 主任支援員]

TURN

①

大田区立障がい者総合サポートセンター(以下、さぼーとぴあ)は、障害のある方のサポート拠点として開設。障害のある方もない方も、ともに支えあう出会いとつながりが実現できるように、常に進化する施設を目指している。「たまりば」は、その定着支援の一つで、毎週金曜の夜に実施。企業就労している方が立ち寄り、仲間と話したり、一緒に夕飯を食べたりするなど、自由に過ごしている。

②

2015年より「たまりば」にTURN交流プログラムを取り入れ、音楽家、打楽器奏者の角銅真実と「音」を介した交流を続け、初年度のTURNフェスやTURNフェス2などに参加する。2018年より、人形映画監督の飯塚貴士との交流を開始。

③

Q1 TURNの皆さんが当事者の皆さんの目線に合わせて交流していただくことで、皆さんも笑顔でコミュニケーションをとっている様子が印象的です。当事者の皆さんもTURNの皆さんと話したりゲームしたりするのを楽しみにしているようです。

Q2 さまざまな人と出会い、話をする中で新しい価値観を身につけることができます。私たち、支援者と異なった視点で交流する様子を見てみると、私たちでは引き出せない表情に出会うことがあります。笑顔でいられる場所があることは、皆さんにとっても安心につながるのではないのでしょうか。

新たな価値観、見たことのない表情の発見

③ Q1.これまでの「交流」を通して、心境の変化や心に残っていることはありますか？ Q2.「交流」の可能性は、どのようなところだと思いますか？

8



濱崎久美子
Kumiko Hamazaki
[金町学園 園長]

TURN

①

金町学園は、1933年に葛飾区に設立された、主として聴覚障害児を対象とした福祉型障害児入所施設。聴覚に障害のある5~20歳の子供たちが、社会自立を目指して集団生活をしながら、都内のろう学校に通っている。本人や家庭の事情による課題の解決を図れるよう支援している。

②

2018年よりTURN交流プログラムを開始。これまでヴァガボンドのテンギョウ・クラ、ダンサーの森山開次などが訪れ、短期間の交流を行った。その後、絵かきで映像・アニメーション作家の松本力と、手製の映像装置「絵巻物マシーン」を用いてアニメーションを制作・上映するなどの活動を実施。

③

Q1 聴覚障害だけでなく自閉的傾向や知的障害、発達障害を重ね合わせている子供たちが、共通の言葉もないのに森山さんや松本さんに徐々に近づいていき、いつの間にか「一緒にいても当たり前」的な空間をつくってました。そして、その共通の空間の中で、自然にお互いの役割を理解したかのような動きができていたのに驚かされました。

Q2 同じ空間をつくることでできてその中で動ける、ということは、その空間に関心を惹かれるものや自分にはないものがあれば、子供自身が自然に模倣し始める、ということにつながると思われます。それは、環境に感化される力がある、ということですので、交流は子供のもつ可能性をひらかせる働きかけの一つになるだろうと期待できます。

子供の可能性をひらく働きかけに

Machida Sekai ito
町田と世界をつなぐ糸
 クラフト工房 La Mano と 五十嵐靖晃

La Manoとの交流で気づいた、糸の力

2015年春、アーティストの五十嵐靖晃さんは、初めて東京・町田市にある「クラフト工房 La Mano」(以下、La Mano)を訪れました。スペイン語で、「手」という意味をもつ La Mano (ラマノ)。染め物や織り物といった製品づくりや、絵や刺繍などの表現活動を行い、手仕事を大事にする障害者就労継続支援施設です。La Manoとの交流から「糸には人と人をつなぐ力があるのではないか」と魅せられた五十嵐さんは、La Manoの糸を手にとり、世界各地を訪れます。その糸は時を経て、多くの出会いを生み出しました。

イラスト・ふるやまなつみ



1978年、千葉県生まれ。協働を通じて、その土地の暮らしと自然とを美しく接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。

1992年、東京都町田市にて障害者の作業所として設立。2009年より就労継続支援B型事業開始。

TURN の「ことば」

TURNでは、さまざまな人たちが会い、交流することを通して書き留められた「ことば」を大切に、さまざまな形で発信している。

(日本語訳)

O coração das pessoas muda. Não há um mundo para cada pessoa, mas sim um mundo para cada coração. No momento em que o coração muda, a maneira de perceber o mundo se transforma, e talvez o mundo também passe a ser diferente. Hoje sinto que o mundo que eu vejo não é mais o mesmo.

People's heart changes. There is not a world for each people but a world turns different too when the heart changes. Today I feel the world I see is not the same anymore.

人の心は変化する。人の数だけ世界があるのではなく、人の心の数だけ世界がある。心が変わると、世界の捉え方が変わり、そして世界も変わっていくのだろう。今日、自分が捉えるこの世界は少し変わったような気がした。

「文」五十嵐靖晃 / 筆」日比野克彦

ブラジル・サンパウロの自閉症児療育施設で

2016年5月、アーティストの五十嵐靖晃は、江戸組紐の職人から研修を受けた後、その伝統工芸の所作と技術を携えて、ブラジルのサンパウロにある自閉症児療育施設「PIPA」に行きました。約1カ月間、子供たちやスタッフと一緒にランニングしたり、総糸を糸玉にしたり、藍染に取り組んだり。そうした交流の時間を通して、たくさんの「ことば」が生まれました。「ことば」は、日比野克彦によって大きく色鮮やかに描かれ、リオデジャネイロの会場で交流プログラムの成果による展示やワークショップとともに紹介されました。

TURN の「ことば」はコチラから

「TURN NOTE」

TURNのさまざまなシーンにおける発見や葛藤、予感、思いとともに、発言者の「その人らしさ」が感じ取れる言葉を、その場のリアルな瞬間とともに収録。

これまでの「TURN NOTE」はTURN公式ウェブサイトの「タイムライン」よりご覧いただけます。



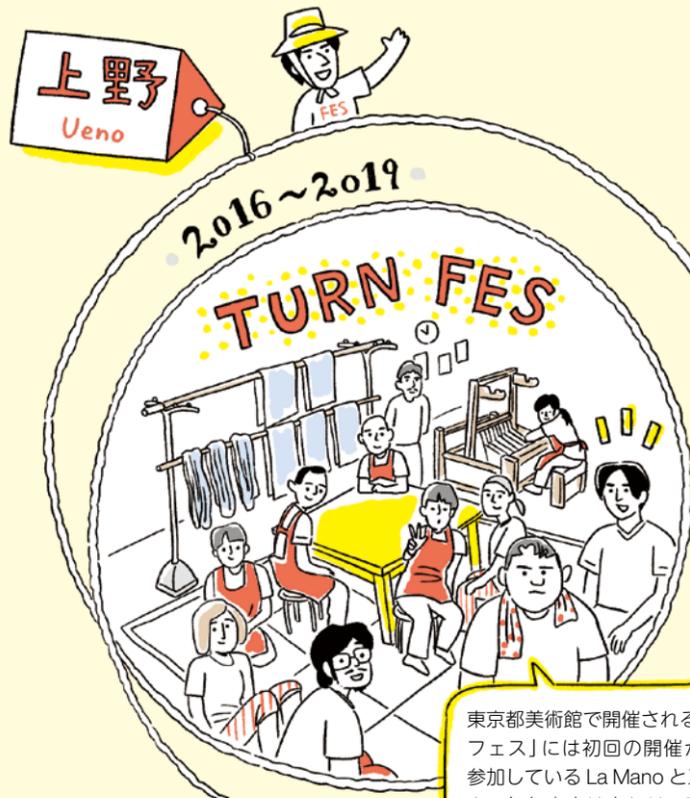
「タイムライン」

ウェブサイト内のタイムラインでは、TURNのイベントのこと、アーティストや交流先による日々の視点などを描いた活動日誌をアーカイブしています。



→ <https://turn-project.com/timeline>

2016.9



TURN in BIENALSURの際、ペルーで五十嵐さんに遊牧民族の伝統織物・キリムについて教えてくれた佃由紀子さんをゲストにトーク。



江戸組紐を職人から学んだ五十嵐さんは7月よりブラジルで自閉症児童療育施設、PIPA(ピパ)に通う。江戸組紐と一緒に組んだり仕込みの過程を通し、子供たちと関係を深め、作品を現地で発表。La Manoで藍染めした木綿の糸も使用。

東京都美術館で開催される「TURNフェス」には初回の開催から毎回参加しているLa Manoと五十嵐さん。毎年内容は変わり、五十嵐さんのインスタレーションやワークショップ、メンバーによる糸紡ぎや機織りなども。



前年のTURN in BIENALSURの参加アーティスト、アレハンドラ・ミスライさんがTURNフェス4参加のために訪日。その機会に、La Manoの「手のプロジェクト」にも参加し藍染めを体験した。

五十嵐さんはペルーにて、自閉症や知的障害の子供や大人が利用する通所施設、セリート・アスールで交流。La Manoの藍染めの糸と、アルパカの毛で作品制作し、9月よりペルー国立高等芸術学校文化センターで展示。

2016.12

ブラジルで五十嵐さんが交流した施設、PIPAの会長が訪日し、La Manoを見学。

サンパウロの交流先から訪問



2018.3

手のプロジェクトスタート!



TURN LANDのプログラムとして、「手のプロジェクト-綿花から糸へ...」が始動。La Manoの畑で綿花を育て、そこから糸をつむぐ。La Manoのメンバー、スタッフ、地域の人をはじめたくさんの人の「手」で行っている。

糸とはなんだろう？ 綿花は波に乗り風を受け海を渡る。アルパカや羊は広大な土地を移動する。人はそれらを紡いで糸にする。糸とは遠かな旅の記憶である。旅は新たな出会いと交流を生み「まなざし」の変化をもたらす。そして世界の捉え方を変えていく。糸にはこの世界を変えていく力がある。[文=五十嵐靖晃(2020年2月)]

2017.7



前年のTURN in BIENALSURの参加アーティスト、アレハンドラ・ミスライさんがTURNフェス4参加のために訪日。その機会に、La Manoの「手のプロジェクト」にも参加し藍染めを体験した。



TURN in BIENALSURの参加アーティスト、イウミ・カタオカさんがアルゼンチンから訪日の際にLa Manoを訪れる。染色体験や見学をした。英語が堪能なLa Manoのメンバー・直美さんが通訳をしてくださるなど、皆に優しく迎え入れてもらう。

La Mano



イウミカタオカさん 訪問



手から手へ。上野、ブラジル、ペルーを旅する糸

エッセイ

〈アート×哲学対話〉がひろく 共生の新たな可能性

梶谷真司 「哲学者」

だれでも哲学的な対話に取り組める、「考える方法」を提唱する梶谷真司さん。
梶谷さんにとつての「アート」とは、そして「TURN」とは。

「カテゴリー分けをしない」 「コミュニケーション」

今年の5月、TURNのプロジェクトデザイナーのライラ・カセムさんから誘われて、TURNミーティングで登壇させていただいた。今回のテーマは「未来のコミュニケーションとは何か？」であった。ライラさんとTURNを監修する日比野克彦さんのほか、障害とアートとかけ合わせたビジネスを展開する松田崇弥さんと一緒に、多様な人たちがつながるためのコミュニケーションとはどのようなものでありうるのかについて、それぞれの経験に基づいて語り合った。

その時の話からいろいろなインスピレーションを受けたが、なかでも重要だと思ったのは、ライラさんが言った「カテゴリー分けをしない」ということだ。通常のコミュニケーションでは、自分や相手の身分、立場、所属、属性をはっきりさせてから関わろうとする。これはたしかに便利であり、効率的でもある。年齢や世代、職業や学歴、出身や住んでいるところ、性的傾向や障害の有無など、自分や相手が何者か分かっていれば、基本情報を踏まえて、相手に合わせたコミュニケーションがとれる。相手に何を期待し、どういう配慮をすればいいかわかる。議論するときの戦略も立てやすい。けれどもそれは、その人自身を見ないということにもつながる。その人の一部だけを見たり、全体をゆがめたりする。しかもその人自身も、自分をそのカテゴリーの中に限定し、そのような人間としてしかコミュニケーションをとらなくなりやすい。

どこでも行われているごく普通のコミュニケーションは、実はかなり不自由で、人をつなげるよりも、下手をすれば、対立や分断を生みかねない。だから、そういう制約を取っ払うために、一時的にせよ、カテゴリー分けはやめたほうがいい。

コミュニケーションをとる言っても、ただ話をすればいいというものではない。やり方によって、まったく違ったものになる。そのことを私は哲学対話を通して痛感してきた。そうした同じ問題意識をTURNでも共有できたのが、私にとつては大きな励みになった。

アートプロジェクトと哲学対話の似ているところ

このように哲学対話は、TURNの活動と目指すところも、大切に行っていることも重なるところが多い。

① 何を言ってもいい。
② 人の言うことに対して否定的な態度をとらない。
③ お互いに問いかけるようにする。
④ 発言せず、ただ聞いているだけでもいい。
⑤ 知識ではなく、自分の経験にそくして話す。
⑥ 意見が変わってもいい。
⑦ 話がまとまらなくてもいい。
⑧ 分からなくなってもいい。

① 何を言ってもいい。何と言ってもいいところには、思考の自由はない。私たちは、言いたいことを言わず、周りを気にして、その場にふさわしいことを言えるものでもない。具体的にどうすればそれができるかわからないからだ。対話のルールには、そのためのヒントがある。何でも気楽に話す。否定も肯定もしない。お互いに問いかける。分からないことを歓迎する。次に考えるべきことは、どういう場所で、どのようにこれを実現するかである。

③ 次③のルールは、対話を哲学的にしてくれる。問いもなしに考えても、ただぼんやりぐるぐると思いを巡らせるだけだ。問うことで思考は前に進み、積み重なると、それにお互い問いかけることもなく、ただ言いたいことを言っているだけでは、ただ一方的な表現にとどまり、たんなる憂さ晴らしで終わりかねない。一方的な発言だけでは、お互いすれ違うことも多い。あるいは、まともに聞いていないかもしれない。問うことで私たちは、自分を相手に開き、相手の中に入る。問われた相手は、それに答えようとする中で、自分の外に出てくる。だから問うことで私たちは、お互いにきちんと向き合う。そして問われることで自分自身にも向き合い、自分の考えの前提を改めて問い直すきっかけになる。

④ ルールの④は、無理やり話をさせられずすむようにする。私たちはしばしば、話をさせられる。しかしすると、傷つかないように「適当なこと」を言ってしまうと、傷つかないように「適当なこと」を言ってしまう。離脱しようとする。すると、対話から退いてしまい、離脱してしまいかねない。その人が話したくなる時まで待てばいい。話さない自由があれば、話す自由もない。だから何でも言っていない場にしようと思つたら、話したくないければ話さないというルールが必要になる。

⑤ ルール⑤は多様な人が参加するためにとくに重要で

ある。私たちは通常、知識を身につけて、それに基づいて話そうとする。そうすると、知識の多い人が対話を支配し、それ以外の人は聞き役に回るしかなくなる。これでお互いが隔てなく、率直に話すことはできなくなる。知識に依拠しないのは、対等であるために非常に重要なことなのだ。また知識に基づいて話すのは、カテゴリー分けにつながる。誰が何の専門家か線引きをし、話す人も聞く人もその立場、役割に縛りつけ、それ以外の考え方をしにくくさせる。

⑥ ルールの⑥もこれに似ている。哲学対話は、共に考える場であつて、自分の立場を主張し、守る場ではない。自分の立場を固定せず、意見を自由に変えることができる。物事をいろいろな角度から考えられ、思考の幅を広げてくれる。

⑦ ⑧は気楽に話すためのルールである。話がまとまらないと話せないのであれば、考えがまとまるまで話すのを躊躇するだろう。自信のある人しか話せなくなる。まとまらないまましゃべっても、誰かがまとめてくれるかもしれない。共に考えようとは、ある意味、自分の発言に責任を持たなくてもいいということでもある。

また、私たちは通常、たえず「分かりました」ということを求められている。分かつてなくても、「分かりました」と言われる。だが、それでは話が終わってしまう。とりわけお互いに問いかけることが難しくなる。だが、「分からない」とは問うことがあるということであり、問いがあれば、考えることがあるということ、つまり対話する理由、関わり合う理由があるということだ。だから哲学対話では、「分からなくなる」のは常にある。多様な人たちが共生するためにどうすればいいのかわからない。互いに話し合う、理解し合う、認め合う、寛容

対話とアートプロジェクト——この一見まったく違うように見えるものが、なぜ似ているのだろうか。

哲学対話は、ある意味とてもシンプルである。ともに問い、考え、語り、聞く——これだけのことだ。ただしそれは、たんなるとりよめのないおしゃべりでも、問題を解決するための話し合いでも、それぞれの意見を言い合うディスカッションでもない。哲学対話をそうした他のものから区別しているのは、次のような8つのルールである。

- ① 何を言ってもいい。
- ② 人の言うことに対して否定的な態度をとらない。
- ③ お互いに問いかけるようにする。
- ④ 発言せず、ただ聞いているだけでもいい。
- ⑤ 知識ではなく、自分の経験にそくして話す。
- ⑥ 意見が変わってもいい。
- ⑦ 話がまとまらなくてもいい。
- ⑧ 分からなくなってもいい。

アートには、こうしたことを形にする力がある。TURNミーティングの後、TURNフェスにも参加して、あらためてそのことがよく分かった。しかもアートは、言葉による制約を超えることができる。一度に多くの人が参加できる。これは対話にはないアートの特徴であろう。

だが同時に、私としては、言葉を使うこと、とりわけ共に問い、考え、語り、聞くことによつてこそ開かれる可能性もさらに探っていきたい。私にとつてTURNは、そのためのヒントときっかけに満ちた場にいる。

梶谷真司（かじたに・しんじ）



東京大学大学院総合文化研究科・教授。1966年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。専門は哲学・医療史・比較文化。著書に『コミュニティ現象学の根本問題』身体と感情からの思索（京都大学学術出版会、2002年）、「考えるとはどういうことか」0歳から100歳までの哲学入門（幻冬舎、2018年）などがある。近年は哲学対話を通して、学校教育、地域コミュニティなどで、「共に考える場」をつくる活動を行っている。

TURNフェス5

2019年8月、「Pathways 身のゆくみち」をタイトルに開催した「TURNフェス5」。展示のほか、ワークショップ、ツアー、パフォーマンス、トークなどの多彩なプログラムにさまざまな人たちが集結した。体操が始まったり、サルサ音楽の陽気さに包まれたり、ドラッグクイーンによるステージイベントに遭遇したり。同時多発的にプログラムが繰り広げられたこの4日間は何だったのだろうか。入り口から出口までの道のりを追いながら、「身のゆくみち」に思いを巡らせたい。 写真=加藤 甫

TURNフェス5「Pathways 身のゆくみち」 会期=2019年8月16日(金)~18日(日)、20日(火) 会場=東京都美術館
主催=東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京・東京都美術館、特定非営利活動法人 Art's Embrace、国立大学法人東京藝術大学

TURNから社会の面白さを探り・巡るツアー

『たき火』(1972年)

オープニングトーク

8月
16日

「ものの会」と一緒にまわるお散歩見学ツアー

TIMELINE

IN-Accessibility 一世の中の排除から考え実現させるアクセシビリティ

オープニングツアー

『あえかなる部屋 ー内藤礼と、光たち』(2015年)

ワークショップ前の「準備体操」

ツアー&コミュニケーション

トーク&レクチャー

ライブ&パフォーマンス

シアター



8月
18日

NIN_NINとまわる未来言語ツアー

TURNラップのど自慢(公開練習)

ゼミ3「じぶんをつくる」

NIN_NINとまわる未来言語ツアー

ワークショップ前の「準備体操」

目が見えない人&耳が聞こえない人と
みなさんがつくる共感ツアー

NIN_NINとまわる未来言語ツアー

ゼミ1「ことばをつくる」

8月
17日

アートとサッカーとTURNの親和性

TIMELINE

オープニングナイト

ワークショップ後の「発表会」

レクチャー:「わたしたち」の場所を考えるゼミ[in/ex-clusion]

『TOTA』(2012年)

一緒にみる、伝え合うツアー

ラ・マーニャとユミのサルサ・バー

『つむぐもの』(2016年)

会話によってみえてくる美術鑑賞会

ゼミ2「ものをつくる」

Theのど自慢 YES! FUTURE ~性について語ろう~

『LISTEN リッスン』(2016年)

耳が聞こえない鑑賞人
小笠原新也が筆談でご案内と鑑賞

ツアー&コミュニケーション トーク&レクチャー ライブ&パフォーマンス シアター



『こんばんはII』(2018年)

TUNE(調律)を通してTURNする —エクアドルで見出した音楽と感性の変化—

「みかんの木」の子供たちと楽しい遠足ツアー!

未来の人たち —2029年の日本の教育と福祉—

地球上のいろいろなところにあるTURN

ベビーといっしょにミュージアム

きょうだい児 —親でも友達でもない人たちがみる障害と社会と自分—

TURN と BIENALSUR ~人とみちの巡り会い~

ラ・マーニャとユミのサルサ・バー

上映会『ろう学生がつくる映画と表現』

ツアー&コミュニケーション

トーク&レクチャー

ライブ&パフォーマンス

シアター



8月
20日

とびラーTURNさんぽ

NIN_NINとまわる未来言語ツアー

一人ひとりの自発的な学びを引き出す多彩なアプローチ

ワークショップ前の「準備体操」

TIMELINE

『もうろうをいきる』(2017年)

身体で遊び、表情とオドル

ラ・マーニャとユミのサルサ・バー

TURNラップのご自慢(本番)



当事者の視点、自分事の場合

今回のオーダーは「TURNフェスを当事者の視点で撮ってほしい」ということ。4日間の会期中、そして手元に残った7500枚の写真データを前に考え続けました。「TURNフェスの『当事者』とは誰だろう?」と。運営者でも、支援者でも、記録者でも、障害者の息子がいます(僕にはダウン症のような人にとってここが自分事の場合となるのだろうか? 悩みに悩んだ末、まず立場について考えすぎることをやめました。いつもの立場や考え方をなるべく手放してみる。TURNフェスを純粹に楽しもうとしてみる。そうして撮影した写真群は、足りないカットもあるかもしれないけれど、そのこと自体にも寛容になってみる。足りない自分を受け入れて、正面からぶつかってみることにしました。



加藤 甫
(かとう・はじめ)
[写真家]

桃三ふれあいの家メンバーと

TURNフェス5では、桃三ふれあいの家でこの10年間、施設利用者によって描きためられた1000枚の「絵手紙」を披露した。それに合わせて絵手紙のワークショップも開催、多くの参加者が絵手紙の面白さを再発見してくれたかな。

今回のフェスでは、施設を利用している方が数人会場までいらして、いつもとは違う時間を一緒に楽しむことができた。16日と20日の2回、それぞれ6人程の利用者とスタッフが、西荻窪から会場である上野の東京都美術館までいらしてくれた。お昼頃に到着して、まずは美術館のレストランでランチを楽しみ、13:00からフェスの会場をゆっくりと観て回った。足腰の弱い方もいるので、念のために車椅子も使ったツアー。各ブースで展示の説明を受けたり、ワークショップに参加したり、短い時間だったけど思い思いに楽しんでた。

それにしても皆さん若々しい。いつもより少しオシャレをして、違う場を楽しんでいる。好奇心も旺盛で気になるものがあると会場のスタッフをつかまえて質問をする。

1日目の参加者で、アーティストの岩田とも子さんの「意識の散歩」というワークショップに夢中になった方が何人かいた。白い紙をクシャクシャにして開いてできたシワを山や谷に見立て、その中を鉛筆で辿ってそれぞれ自由に自分のイメージの中を旅するという遊び。1枚の紙を共有して、神社にお参りをしたり、温泉に入ったり、きゃーきゃー言いながら随分と長い旅を楽しんだお2人も。

飯塚貴士さんが開催していた、参加者が描いた絵を使って映像制作をするワークショップに参加された方は、後から完成する映像を楽しみにしていた。

クラフト工房 La Manoのブースでは糸紬ぎの作業をしばらく眺めて「ああ、私も昔随分とやったわ、でも、昔の糸車と違うわねー」。するとアーティストの五十嵐靖晃君が古い糸車を持って来て見せてくれて、「あー、これこれー」。

赤荻徹さん、洋子さんご夫妻が主催し、主にダウン症の子供たちが参加している絵の教室「アトリエ・エー」のブースでは、ちょっと涙ぐむ方も。聞くとお孫さんにダウン症の子がいるそうで、楽しそうに作品を作ったり、一生懸命作業したりしている方を目にするのが胸がいっぱいになってしまうとのこと。

「気まぐれ八百屋だんだん」での空の絵と屋根。1メートルくらいの高さの、舞台セットのような屋根には登ることができる。ツアーに参加してくれた利用者のカヨちゃんとお2人で屋根の上に座って「昭和のホームドラマみたいだね」と。登って腰を下ろしてみると、いろいろと話してみたくなる不思議な屋根だった。

会場を順番に観て回り、最後が絵手紙のコーナー。1000枚並ぶとなかなかの見栄え。皆さん自分の作品を探す。1人で150枚以上の作品を展示されている方もいる。美術館で展示されるなんて思ってもみなかったよね、皆さん。

今回のツアーでは、施設で会うのとはまた違った利用者の方々の姿や表情が見れた。いつもにも増して楽しそうな顔。好奇心旺盛で何にでも興味津々。高齢者だなんてことを忘れてしまう。どんなに歳をとったって毎日のアップデートを怠らない。いつまでも好奇心の先端は瑞々しくあるのだねえ。

伊勢克也 [アーティスト]

白鳥建二さんの絵手紙

全盲の美術鑑賞者である白鳥建二さんによる、1000枚の絵手紙を題材に全盲の方に言葉で絵を説明するという、ツアーに参加した。

きょうだい児

兄弟姉妹に障害を持つ人がいる人を「きょうだい児」というらしい。今回初めて知った言葉。今回フェスに参加されている「ヘラルボニー」のお2人は、自閉症のお兄さんを持っている「きょうだい児」で、今の活動にこの事は大きく影響しているとのこと。実は僕も姉がろう者なので「きょうだい児」ということになる。障害を持つ人と同じ数かそれ以上の「きょうだい児」がいると考えるといいのかな。

最終日に「きょうだい児」親でも友達でもない人たちがみる障害と社会と自分」というとても気になるテーマのトークが行われた。残念ながら時間が合わず、ほとんど内容はにふれることができなかった。僕のことを少し。家族という関係と、その外側にある社会と自分、ちょっと違う姉がおかれる社会との関係。成長するにしたがい、家族・自分・姉・社会の関係の中に何かうまく整理できない異物みたいなものを感じ始める。それは姉が持つ特性からくることは早くに認識していた。親は、当然であるが障害を持つ子供を自分の全てをかけて幸せにしようとする。我が子の全てを受け入れる。そんな親という立場とも違うのが「きょうだい児」。

ちょっとややこしく理解してもらえないから分らないのだけれど僕はこう考える。子供の全てが親の人生の一部分である。親は子供の人生の一部分でしかない。兄弟姉妹も同様。子供は自分と親・兄弟姉妹との関係を作り編集し直し続けていく。

兄弟の関係は、年がそれほど離れていない場合、同じような存在が気がついたら身近にいたということからスタートする。そして兄弟姉妹という中途半端(?)な関係でずっと続く。どんなに離れようたって、所詮お互いに刷り込みあいが育ってきたのだから、雌型と雄型のようなもの。どちらがどちらかは複雑な構造なので簡単ではない。僕自身、姉の存在によって僕の生きることの一部分が形作られていることは間違いない。何やら体の一部がつかっているような気がする。不思議だ。

でも、障害の種類や程度によって関係は変わってくるの。一概には言えないのかな。「きょうだい児」ねー。

牧原依里さんのろう中高生のための映画制作ワークショップ

今回僕が一番注目したワークショップ。空いている時間にちよくちよく覗きに行った。いくつかのテーマで映像表現を考えるワークショップ。例えば「花の美しさを視覚のみでどう表現するか」等。3つのグループに分かれてディスカッションが行われている。この空間の面白さに引き込まれてしまった。以下箇条書きで。

- 他のブースにはない空気。
- コントロールされた音のない世界。
- コントロールされない音の面白さ。
- 視覚によるコミュニケーションのための体の動き。
- 手話の振る舞い。
- 手の位置。
- 顔の表情。
- 正面、前面、人間の形が違うような。

鑑賞することを考えるには、とても良い体験となった。内容というよりも、絵の表面で起きている現象を伝えることがまず最初にやらなければならないこと。「スイカ」と思って説明していくと「あれ、カボチャに見えてきた?」ある言葉を使って「スイカ」を説明していくと「カボチャ」になる。確かに「スイカ」と「カボチャ」は近いんだ。むむ? 「花」というモノの視覚体験がない方に言葉で説明する場合は「花」という名札を外して「花」が描かれた絵の様子を説明していくことになる。これは美術作品鑑賞には重要なことだなあ。うーん。



伊勢克也 (いせ・かつや)

1960年、岩手県盛岡市生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了。自然/人工物/メディア空間等さまざまな環境で発生し存在するモノやイメージが形づくる形態をテーマに作品を制作し、さまざまなワークショップを行っている。個展やグループ展等で作品を発表。現在、女子美術大学短期大学部教授デザインコースメディア担当。

エッセイ

きょうだい児という挑戦

藤木和子 「弁護士」

TURNフェスで、トークイベントに登壇した藤木和子さん。トークのテーマは「きょうだい児」だった。5歳のときから耳の聞こえない弟と一緒に成長した藤木さんにとって、「障害」とは、そして「きょうだい」とは。

「きょうだい児」とは、障害や病気がある人の「きょうだい（兄弟姉妹）」のことをいう。現在、全国各地、インターネット上での集いの場が広がり、その存在や特有の体験が注目されつつある。

私の場合は、弟の耳が聞こえないことが確定した5歳の時にきょうだい児になった。彼が3歳の時だった。脳波の検査を終えてまだ眠らされたままの弟が母に抱かれて帰宅した。その時に、「聞こえるお姉ちゃん」になった。よくよく考えると、世の中のお姉ちゃんのはほとんどは聞こえるお姉ちゃんなのだが。

以来、友達とは違うことを考え、悩み、喜び、別世界を生きている感覚がずっとあった。20代半ばで「きょうだい児」という「存在とつながり」、「体験やヒントの共有」の鍵になる言葉を偶然知った時は、「こんなにも自分の感覚を言い表してくれる言葉があったのか!」と衝撃で、きょうだい児関連の集まりや書籍にのめり込んでいった。



否めない。誰も悪くないところが難しい。当時、きょうだい児という言葉を知っていたら、私自身も親も周囲の大人も違っていたのではないだろうか。

やさしくないお姉ちゃんは、テレビゲームもケンカも手加減なかった。弟もよく懲りず、やり返されもしながら、私が高校で留学するまで、ほぼ毎日夢中になって遊んだ。何も考えずに純粋に楽しかった!と言えるのは、ゲームには字幕があったことが大きいと思う。親との交渉やキャラの貸し借りなどの協力もした。やっぱり助けてあげるではなく、助け合うだ。私は「弁護士になったら思いっきり言いたいことを言ってやるぜ」という隠れた野望を持った。

「姉弟」から「きょうだい」へ

今、私と弟はお互いに30代の大人になり、もはや3歳差で姉も弟もない。用事があればメールで連絡を取り、盆暮れや冠婚葬祭で会う。もうケンカはしないし、親の老後の話もする。実は、高校生の時から私の希望で呼び方は「お姉ちゃん」ではなく名前だ。世間でも、「兄弟姉妹」に代わって「きょうだい」という、上下関係や性別がない言葉が公的な場でも使われるようになってきた。自分も家族も関係も社会も言葉も、変わっていく。自分の生活も周囲の人間関係も、やりたいことも好きなことも自分で選択していくようになる。

「きょうだい児」という言葉をもちに語れる社会

弁護士になった私があるが、きょうだい児として、社会に向けて、かつての自分の言葉を使えば、言いたいことを言わせていただけるようになった。きょうだい児として突き抜けたと思っていないが、いつもハードルを飛び越える勇氣が必要だ。そのハードルが、今の社会できょうだい児が挑戦になる意味と価値なのだろう。きょう

姉弟は対等だぜ

私が、子どもの頃に強く感じていたのは、親や周囲の大人からの「お姉ちゃんは弟をやさしく助けてあげてほしい、弟に障害があればなおさら」という願いであり、期待である。しかし、私は、もともとの性格があまりお姉ちゃんらしくなく、弟とはテレビゲームなどの遊びも取っ組み合いのケンカも常に本気だった。今は手話を中心だが、当時は大きく表情と身振りを付けて口をゆっくりはつきり開けて話していた。

弟が聞こえればいいのと思ったことは一度もないが、「姉弟は『対等』だぜ」「障害なんて関係ないぜ」と言いたかった。親や周囲の大人の弟へのやさしさは愛情や心配からなのはわかるが、それが弟の「障害」を大きくしているという疑問があった。それで、音楽を聴いたり、歌ったりしていることが矛盾に見えた。必要に応じて「通訳」するのはいいが、何でも「弟に伝えて」ではなく、直接伝える努力をしてほしかった。と言えば、正論のようだが、嫉妬があったことは

だ。兄という言葉があり、語れる社会は誰にとっても生きやすい社会なはずだ。

自身の考えについては、障害のある友達らと「きょうだい同士は『対等』でいたい。互いに我慢せず遠慮なく話したい」を共通のメッセージとして伝えたいというところに行き着いて、ようやく軸を持てた気がする。しかし、様々な障害種別や関係、状況がある中で「対等」の内容は常に考え続けなければいけない。また、語りたい人も語りたくない人も、語れることも語れないこともある。それぞれに物語があり、人生がある。きょうだい児という「挑戦」である。

そのようなことを考えている中でTURNフェス5でのトーク「きょうだい児」に誘っていただいた。サブタイトルの「親でも友達でもない人たちがみる障害と社会と自分」は、肩の力が抜けていながら切れ味よく絶妙だ。「一人国連」のライラ・カセムさんを司会に、きょうだい児の立場であり、アートの関わる岩中可南子さんと高橋梨佳さん。TURNの開かれた自由でフラットな空間の中では、すべてのエピソードやユーモア、関係のカタチがOKで、難しい課題だからこそ面白い、と笑いを交えながらヒョイと挑戦できてしまいたいような感覚が身体に残っている。



藤木和子（ふじき・かずこ）

1982年生まれ。2012年弁護士登録。聴覚障害と手話家族関係を専門。聞こえないきょうだいをもつSODASOと家族代表。Sibko to 障害者のきょうだいのためのサイト共同運営者のほか、複数のきょうだい関係団体の運営に関わり、精力的に発信。全国各地の自治体、学校、団体で子どもから大人に向けて「きょうだい・家族」「法律・人権」をテーマに講演活動を行う。

いかに伝え合うか
〜「障害」とは何ぞや〜

石川絵理

ドキドキ、わくわく、どんな方が、どういふ物語を見せてくれるんだろう。「TURNフェス」会場の入口に立つたびに、このように気分が高揚します。今回はさらに「目が見えない人・関場さんと一緒に作るツアー」ということで、さらに高揚感が増します。

サポーターが、「目が見えない人&耳が聞こえない人」とみなさんがつくる共感ツアーは、こちらですよ〜!と来場者に声をかけてくれます。(ツアーの名前、長すぎたかな)と思いつつ、1人、2人と受付周りに集まってくる方を眺めつつ、先日の打ち合わせでの内容を反芻して、「関場さん」にどのように伝えようかなとも考えていました。

ある夏の夜、このツアーをどのように提示していくのか、私たちは手話通訳を挟みつつ手探りの状態でした。共通の言語として日本語を使いますが、石川は読み書きが得意で、関場さんは聞いてしゃべることに長けています。こんな2人がいかに伝え合うのか、どう関わっていただくか。「おせっかい」な行き過ぎた干渉、そして拒絶反応を恐れるあまり無関心を装った「放置」は、障害を持つ当事者の周辺で頻発することです。最初から「適正な距離」で接することはできないという自覚のもとに、お互いに手探りしながらでよい、という空気感はまだありません。それこそが「障害」の正体であると考えています。これをこのツアーで見せていけばよいのではないかと。

REPORT

見えない人&聞こえない人と一緒にめぐるツアーから

TURNフェスのツアープログラムでは、スタッフによるガイドツアーのみならず、多彩なゲストの専門的な知見や経験を通して様々な楽しみ方を発見するツアーを展開している。今回、「目が見えない人&耳が聞こえない人とみなさんがつくる共感ツアー」の企画者である関場理生さんと石川絵理さん、そして手話通訳者としてサポートに入った瀬戸口裕子さんが、ツアーの企図と当日の体験について振り返った。

目が見えない人&耳が聞こえない人とみなさんがつくる共感ツアー

このツアーでは、視覚障害がある関場理生さんと、聴覚障害のある石川絵理さんがナビゲーターとなり展開した。いくつかの展示やワークショップスペースを巡りながら、ナビゲーターとツアー参加者がさまざまなコミュニケーションや気持ちの伝え方について考え、探索していく。教える/教わるという関係性にとどまらず、ともに体験し考え合う参加型のプログラムを通して、参加者一人ひとりの異なる知覚と視点が見出された。(実施日: 2019年8月17日)



瀬戸口裕子
(せとぐち・ゆうこ)
[手話通訳士]

アート・コミュニケータ。NPO法人TA-net会員。生活に密着した手話通訳から美術館やアートプロジェクトの手話通訳も行う。今年新たな取り組みとして演劇の舞台手話通訳も担う。



関場理生
(せきば・りお)

[ダイアログ・イン・ザ・ダークアテンド]

東京都立総合芸術高校舞台表現科卒業。日本大学芸術学部演劇学科劇作コース卒業後、視覚障害者として演劇に携わる一方、暗闇のエンタテインメント、ダイアログ・イン・ザ・ダークのアテンドとして様々な人の対話の場を創造する。



石川絵理
(いしかわ・えり)

[NPO法人 TA-net 事務局長]

聴覚に障害のある当事者が主体となって観劇支援を推進する活動を展開している。TURNでは年間のプログラムをおとして、アクセシビリティコーディネートを担当。

非言語のコミュニケーションが生まれた新鮮な経験

関場理生

当日は予想通り「伝わらない」。普段私たち当事者が「他の五感」で補うように、ツアー参加者に協力をお願いしました。ツアーで使わせていただいた写真の通り、また紙を折ってつくった小さな風景の通り、五里霧中というか、この世のものではない空間の中で、最後には「伝わらなかったことを楽しむ」ことができたと感じます。そこでは確かに心地よい距離感が存在していました。

石川はこのTURNフェスの初年度から関わっていますが、未だに変わらず持ち続けている「願い」は、今、展示室の中で行われていることが、日本中あちこちで「あたりまえ」のように見られるようになるということです。

私たちは、それぞれの持つ能力に外側から制約を受け、ることなく境界の枠にはめられず、自由に行きたいところに行き、会いたい人に会い、食べたいものを食べ、いろんな触れ合いをして、「人生」という旅を自分自身で好きなように描いて生きていくのです!それが「TURN」なのです。

ろうの方と一緒に企画するのは初めてでした。石川さんに、TURNに参加しないかとお声いただいて、「二人ではなく、参加型だったり、聴覚障害の人と私



写真=加藤 甫

がコミュニケーションをとったりするものだ、何かしらの広がりがあるのでは」と提案すると、それであれば石川さんと展開するのがよいのではという話につながりました。

「多くの人の関わりの中で、異なる価値観の人と一緒に何かをすること」がとてもドラマチックだと思っています。以前、聴覚障害の人と会ったときに「私は手話ができないしどうしたら話せるんだろ」と思う反面、「でも何かしらで伝わるんじゃないかな」とも思いました。聴覚障害の人と視覚障害の人が話したり、何かを共有したりすることができる瞬間が生まれば、すごくドラマチックだな、と。

実際のツアーで難しかったのは、「伝わるものの限界を感じた」ということ。でもそれは目が見えない、耳が聞こえないに限ったことではなく、これまで生きてきた時間の中で、それぞれが頼りにするものが大きく違ったことに関係していたと思います。私は、人とやりとりするときは言葉重視になります。一方で、石川さんは雰囲気というカビジュアルで受け取っていることも多いのかなと感じました。また言葉一つにしても、文字で捉えるのか、音で捉えるのかも受け取り方は違うと思います。そしてその単純な違いだけでなく、パッと見てそこから得る情報や受け取っていく前提、出力の仕方も違うことに改めて気づきました。

こうした難しさに気づいたからこそその発見がいくつもありました。ツアーを進める中で、岩田とも子さんの『意識の散歩』の企画に参加したときに、石川さんに「あ、ここはもう崖で、このまま進むと落ちこつちゃ」というのを、手を使って伝えたら、石川さんがその手をブルブルブルと震わせて「こわいよお」とい

多様性とは「わからなさの平等」かもしれない

瀬戸口裕子

私は「目が見えない人&耳が聞こえない人とみなさんがつくる共感ツアー」の手話通訳として同行しました。聴覚をメインにコミュニケーションをとる目が見えない人と、視覚メインの耳が聞こえない人はお互いを「いちばん遠い存在だ」と言うことがよくあります。

そんな関係さんと石川さんのツアーには多くの(15名くらい)参加者が集まりました。ツアーでは作品を見て、どのように見えるか、どのように感じるかを関係さんと石川さんに伝わるように言葉やジェスチャーを使って対話をしながら回りました。私ともう一人の手話通訳者はいつも通りの通訳をしていました。

しかし、参加者の中にはさまざまながいて、中には中国語しか話せない方がいました。その方には一緒に参加された方が通訳してくださっていましたが、少々わかりづらそうでした。また、弱視の方も参加されていました。その方には介助の方が視覚情報を伝えて下さっていました。手話やジェスチャーを伝えるのは戸惑っているようでした。また見た目は男性なのですが女性の声で話される方がいて、通訳を行う中でその方のことを「彼」「彼女」のどちらで訳したらいいのか迷う場面がありました。結局「彼」と言った後に「彼女」と言いなおしてみたり、迷った挙句「こちらの方」や「チエツクの方」と言ってみたり、迷いながらツアーが終わりました。最後にもう一人の手話通訳者がその方に「あなたのことを彼と言ったり彼女

うふうに返してくれて、「会話ができた！」と感じた瞬間でした。「こわいね」という言葉で受け取ったら、まずその言葉を理解して、そこから感情的に心で感じる、というプロセスがあると思います。それが、触手話でもない非言語のやりとりでは、手の動きから直接感情が伝わってくる。そのダイレクトな会話も新鮮でした。

TURNの良さは、いろんな人がフラットにいるというところ。日常生活の中では、そうした場は少ないと感じます。例えば、車椅子の人は駅員さんがスロープを出して電車に乗りますが、その作業によって周りから切り離されていくような気がして。私自身、お芝居を見に行ったときに「表は階段があるから裏口から」と案内され、その場所から自分だけが切り取られる感じがしました。みんなが同じように居合わせられる場が大事なかもしれません。何かが同じということが、一緒にいるという感覚につながるのでしょうか。美術の展示会も好きですが、音声ガイドを視覚障害者にだけ貸します、というのはフェアじゃないなと思っていました。誰でも使えるほうが良いな、と。一緒に来た晴眼の友人も、同じ条件で楽しめる「同じさ」が良いな。同じ絵を、同じように見ることはできませんが、その絵の情報が展示されていたらそこで知れるとか、絵について誰でも自由に語りあえるスペースがあるとか。同じものを受け取ったうえで「私はこうやって感じたよ」と話せたら、理解と共有がより深まり、「コミュニケーションが取りやすい状況が生まれると思います。」

「構成・文＝畑まりあ」

と言ったりして、すみませんでした」と謝ったところ「彼」と言ってもらえて嬉しかったです」と言われたそうです。その方のことを耳の聞こえない石川さんは最初は見た目から男性だと思っていたらしく、目の見えない関係さんは声から最後まで女性だと思っていたそうです。

私は今回のことを通じて手話通訳者としてのように振る舞ったらよかったのか考えました。いつもなら「耳が聞こえない人(ろう者)」「耳が聞こえる人(聴者)」という二元論で語られる場での手話通訳が多いのですが、これだけさまざまな人が一緒に集まると「〇〇者」という枠組みでの通訳には限界を感じると同時に「個」として参加者一人ひとりが見えるようになることに気づかされました。私自身も「一個人」として振る舞うことが自然な気がしました。

今回のツアーの参加者は、言語や聴覚の情報、視覚の情報など、それぞれ「わかること」と「わからないこと」の内容が大きく違う方が集まったまさに「多様な状態」というのは一人ひとりの「わかる」と「わからない」の内容の違いはあれど、その比率が同じになる、「わからなさの平等」が生まれた瞬間だと感じました。

多様性とは「わからなさの平等」ということなのかも知れません。



不可能性の可能性

小山田 徹

「美術家／京都市立芸術大学美術学部教授」

アートと他領域をさまざまな現場でつなぎ、世代や属性を超えた人と人の出会いを創出してきた小山田徹さん。トークへの登壇を機会に初めて参加した「TURN フェス5」をおおして、考えたことは。「多様性のある社会」や、その実現のために一人ひとりに何ができるのか、その糸口を探る。

わからなさとおき合う謙虚さを

世界は不可能性に満ちている。ネガティブではなくポジティブな意味で。

最近、場作り等の活動をする中でも、コミュニケーションの可能性よりも不可能性に目がいくのです。思いが簡単には伝わらない。共有がまどろっこしい。様々な問題が解決されないまま積み残されている。感情が理性を超える瞬間がある。でも、企画書や報告書、美術のソーシャリー・エンゲイジド・アート特集などにはコミュニケーションの可能性のことはばかりが書かれていたりする。本当かな？ 助成金の在り方や企画の制度の問題でポジティブワードが必要とされ、現実とは違う表現がなされているのではないかと疑ってしまいます。もちろん色んなことが可能になった事例もあるでしょうが、やっぱり全てが可能になった訳では無いのです。逆に、不可能だったことが浮かび上がることの方が大事なのではないかと思うのです。最近、私

たちは鼻持ちならない尊大さを帯びているのではないかと思うことが多い。謙虚さというものを再び考えねばならない時期が来ているような気がするのです。サイエンスの世界でも「わからなさ」が真理探求の都度出てきます。その「わからなさ」から逃げて、「わかる」世界だけで進めると、歪曲された不誠実な世界を構築してしまいます。「わからなさ」と向き合う心は謙虚さが必要です。自然界の節理や複雑な関係のバランスや理解を超える存在に対して、人間の存在の小ささ、希薄さ、奇跡性を思いながら改めて向き合う。これは不可能性からの再出発を繰り返すことでしか前進はないということでもあります。多分、美術や生活全般に関しても同じことが言えると思います。自らの尊大さに気付き、謙虚になることから始めること。

さて、古来、人々はどうのように謙虚さを獲得してきたのでしょうか？ 多分生活に組み込まれた日々の暮らしの中で学ぶことが多かったのではないのでしょうか。自然の中の生命と向き合う採集や農業、畜産などの労働や、災害や自然の変化、手仕事などあり、その都度、方法を発明する必要があること。ゴタゴタギクシヤクとコンタクトを試み、修正しながら続ける。大変だけど面白いという発見。自分が変化していく快楽。嬉しい、敗北。自分が多様性の一部であることと、変化の可能性を秘めていることへの気付き。色々な価値観が同時に存在し、自立性のある時間が複数流れている、正に自然。

多分、今、社会に必要なことの一つとして、このTURNに代表される概念や経験が求められているのだろう。国家の思考や経済の影響で、効率的な右肩上がりの欲望とシステムが社会に浸透し、私たち個人の存在や身体性までもが脅かされて、辛い状況になってきている。その辛さをごまかすために尊大になる。その尊大さが差別や抑圧を引き起こし、コミュニケーションの不可能性が生まれる。しかし、不可能性は可能性という化粧で覆い隠される。私たちは、上手な引き算ができていないのだと思うのです。自分は完全で万能ではない、と気づくこと。それは他者との多様な関係を結び直し、自分が自然世界の一部であることを確認し、ある種の豊かさの中で生きるための第一歩なのです。そのためには、不可能性に今一度目を向けねばならないのです。世界は不可能性の可能性に満ちている。

ど身体的な経験、祭りや共同作業などの集団の経験、日々の食事、挨拶などの作法の在り方などで、自らの謙虚さや対象に対する尊敬の念を育んできたのだろうか？ 刻々と変化する生き物や思い通りにならない気候気象、かなわない自然災害、手の届かない自然美、協働における高揚感、素材や技法に対しての驚きと発見、食べるといふことの安心感、ハグや手当、握手などのボディコンタクトの効果など、思い返してみるとプリミティブなモノやコトが関わっていることが多いような気がするのです。私が小さな焚き火を核とした場作りを行ってきたのも、焚き火の経験自体に、太古の昔から植え込まれた記憶みたいなものがあり、それによって自律的な場と対話が起ころからです。多分、焚き火の前では人々は敬意で謙虚になるのだと思います。その中で対話が時として可能になる瞬間があるのです。対話は、対話する中や対話の後で自分が変化する可能性を持って臨まないと成立しません。意見や思考を変えずに、相手にぶつけるだけで、勝ち負けの状態になるのは討論で対話とは違います。さらに、関係性が強い方がより大きく譲歩する態度を持たない限り対話は成立しません。それには謙虚さが求められ、思考が誘発される環境と状況が必要です。多分、プリミティブなモノ、コトにはその条件があるのでしょうか。

自然世界の一部であることへの自覚

私がTURNフェス5で経験し、思考したことは正に前述のようなことだった。聲、音、唾の方々や様々な生活や思考との出会いで、コミュニケーションの可能性に打ちのめされながら、その実、楽しかったのだ。人間が多様であるという当たり前のことに気付くと、途端に自分が軽くなる感じがします。人間は、自然で、プリミティブで、様々な違いだらけで多様で、同じ人間など一人もいない。だから、今まで自分が有効だと信じ込んでいたコミュニケーションの方法が全く通じないことが



小山田 徹（こやまだ・とほる）

美術家。1961年鹿児島県生まれ。京都市立芸術大学日本画科卒業。98年までパフォーマンスグループ「ダムタイプ」で舞台美術と舞台監督を担当。平行して「風景収集狂舎」の名で様々なコミュニティ、共有空間の開発を行ない現在に至る。近年、焚き火を核とした場の創生の試みとして「ちび火」「Weekend cafe」などの活動を展開している。京都市立芸術大学美術学部彫刻専攻教授。



パラパラ漫画『未来の記憶』
《ソファであそぶおとこのこ》2019年

この作品は、アーティストの松本力さんが、聴覚障害児を対象とした入所型の福祉施設「金町学園」を初めて訪れ、交流した際に出会った風景をもとに制作された。小さな男の子が、繰り返し一人がけのソファと戯れて遊んでいる。松本さんはこの様子を59枚の絵に書き下ろし、それを85枚で構成したGIFアニメーション※1にした。本誌に掲載している64枚は、その一部である。

2019年2月、初めて松本さんは金町学園を訪れた。松本さんの絵やアニメーションを介して交流してみるのはいかがでしょうか、というTURN運営スタッフの提案からこの交流プログラムは始まった。

この日の活動日誌※2には、松本さんが共時性を感じた、金町学園に行く2日前に開催した第7回TURNミーティングで得た気づきが綴られていた。

(ろう者で映画監督の牧原依里さんによると、手話は)

微妙な意味合いや相互の意図、情報の本質を抽象的な側面ととらえて、感じることにこそ、その独自性があると。牧原さんと長年の付き合いを感じさせる手話通訳の方によって、淀みなく語られた、聴者への提言でもあった。ほくは、話したり聞いたり、考えや思いのかたちを音声によって伝えあうのに、何を感じているのか。

そして、初日の交流時に、食事に集中できない子供に対し先生がため息混じりに発した言葉「もう、みていないし」についても記述している。

目の前にいても、相手に声が届いていなければ、「もう、きいていないし」となる。言葉は、表情とまなざしを交しあうことで届けられる。きっと、小さい子の意識には、未分化なものがある、とおもった。だれしもそういうものがあるだろうかとおもうと、愉快になった。みることに集中していくのは、絵を描くのも同じだ。食事もそこそこに、心のおもむくまま、一人掛けのソファに縦横無尽に戯れて、男の子が遊んでいる。ソファがひっくり返りはしないかと心配しながらも、そのまなざしをおっていた。

繰り返される男の子の行為に、まるで手話の延長のような、言葉にならないコミュニケーションを感じていたのかもしれない。

文=田村悠貴 [NPO法人 Art's Embrace]

※1 複数の静止画をコマ送りで表示し、動いているように見せる画像。

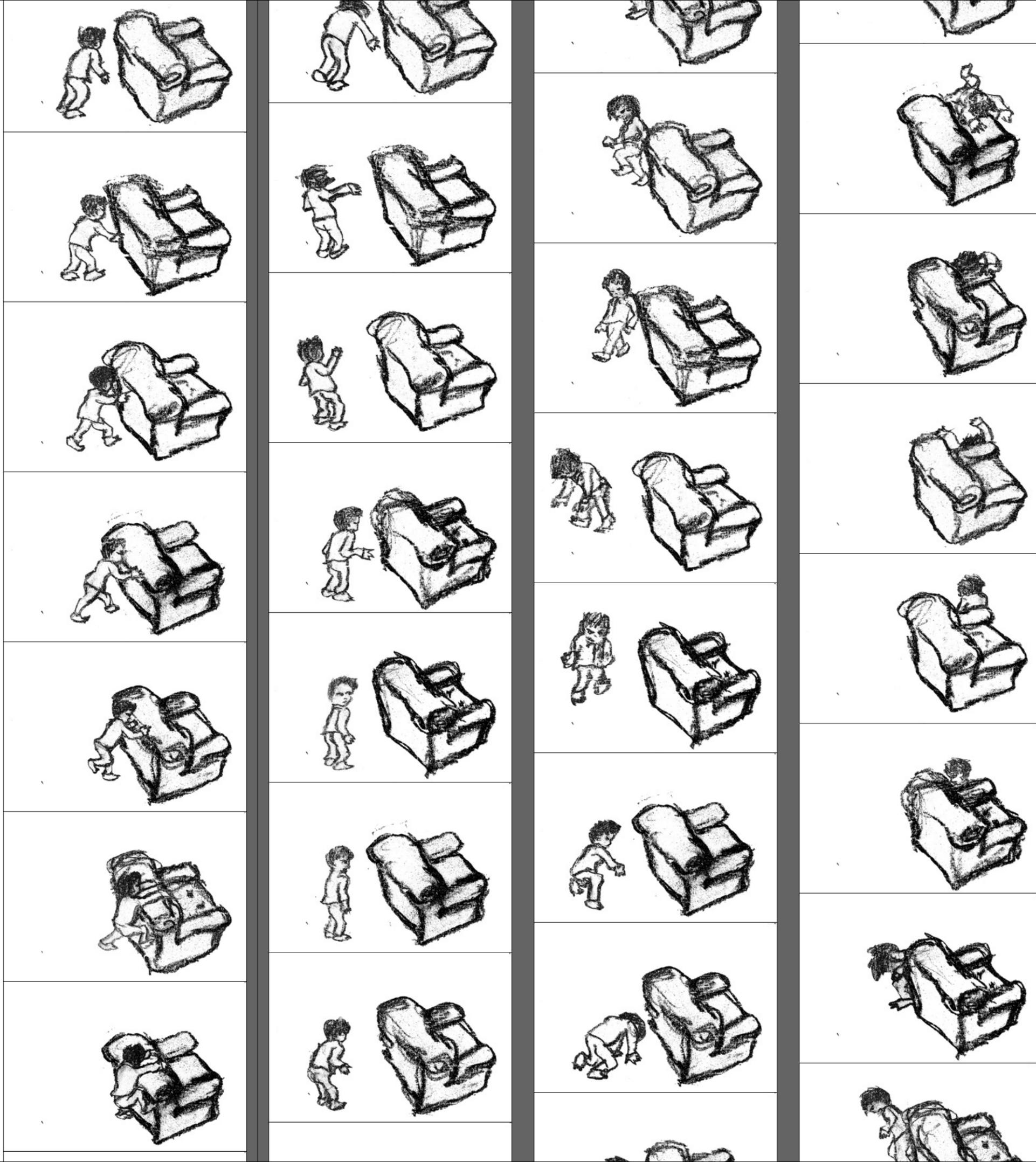
※2 活動日報とGIFアニメーションはこちらからご覧いただけます。

TURN 公式ウェブサイトのタイムライン「もう、みていないし」 → <https://turn-project.com/timeline/diary/5639>



松本力 (まつもと・ちから)

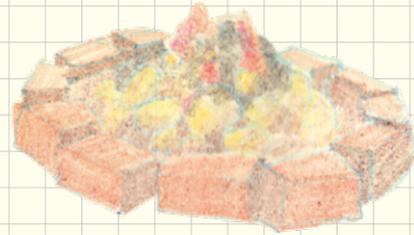
絵かき、映像・アニメーション作家。1967年東京都生まれ。多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン専攻卒業。再生紙にコマ割りのドローイングを描き、透過光を加えビデオに撮る独自の手法でアニメーション作品を制作。国内外での展示、オルガノラウンジや音楽家VOQ(ボック)とのライブで、映像と音楽の空間表現を20年以上続けている。また、手製映像装置「絵巻物マシーン」のワークショップ「踊る人形」を学校や美術館、滞在先など各地で行う。TURNでは、「現在」に「見た」出来事をパラパラ漫画にして「見られた」誰かに渡し、いつか「未来」で見返すことで、現在(未来の時点では過去)の自他の記憶として振り返る、「未来の記憶」の制作を行う。





6月5日

粘土を捏ねることひとつあげても、
日本には、便利な機械がたくさんある。
ここでは、ものが少なく、たくさんの協力を得ることで
それらを成し得ることができる。



6月12日

日本でも、地域によって
焚き方や時間はもちろん、窯の形状も異なる。
国が変われば、燃料まで違っている。
けれど、作品を取り出すまでのわくわくする気持ちは、
どこでも、どんな焼成でも変わらない。

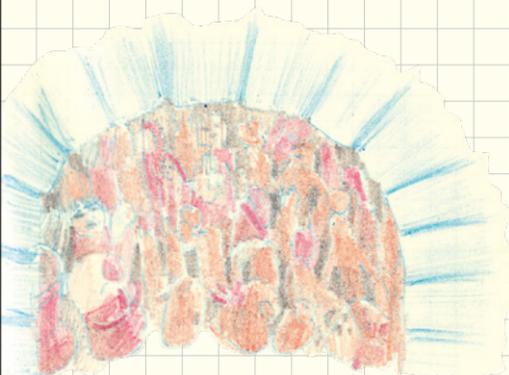
6月14日

写真には、映らないけれど
作品を手に持ち、光を当て、目を近づけて見ると、
キラキラと輝いている。
角度によって光が変わり、とても幻想的だ。
土に魅了されていると同時に、人間が
どんなに手を加えても、素材をねじ曲げることなど
できないのではないかと感じる。



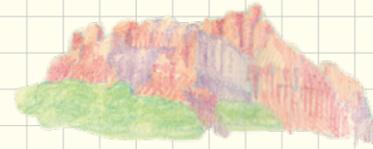
6月24日

最後の窯。
1度目は、結果が想像できなかったため、
とてもよくできたと感じた。
2度目は、もっと良い結果にしようと、
意気込んだ結果、何かものたりないと感じた。
不安で迎えた3度目、想像していたより、とても良かった。
“良い”“悪い”なんて、想像という基準を引くことで、
一喜一憂しているだけなのではないだろうか。



キルメスの土

— 布下翔碁の日記から —



2019年、TURNはアルゼンチン北部のキルメス地域に展
開し、「TURN in TUCUMAN, BIENALSUR」を開催した。
参加アーティストの一人・布下翔碁さんは、現地での日々
の気づきや風景を多彩なスケッチで描いていった。



5月29日

今日は初めて出会った Sergio と
言語でコミュニケーションがとれない。
けれど、お互いに粘土を触っていると
自然と通じ合うことができた。
素材は国境を越えた言語になると感じた。



5月30日

ここでは、どのような作業も、
移動することでさえ、人の協力がなければ叶わない。
周囲の優しさが、日本にいる時より鮮明に見えてきた。
文明の発達は、これらを上から
塗りつぶしているのかもしれない。

5月31日

言語の伝わらない中で、
身振りや絵を通じてひとつのイメージを作り、
共同でひとつの作品を造形した。
手で文字を書くように、
指から粘土に考えが伝わっているみたいだ。





キルメスの地域特性

夏と冬で寒暖の差が激しく、さまざまな野生動物が生息するこの地域には、かつてキルメスという農耕民族が暮らしていました。16世紀に入ると、スペインからの侵略者が侵攻し、先住民族への迫害が始まりました。キルメス族は最後まで抵抗した部族でしたが、遂にはスペインに征服され、約1500km離れたブエノスアイレス郊外まで「徒歩での強制移住」を強いられました。暑さと過度な歩行のなか、多くの人が途中で死に絶えました。彼らが目指した土地は「キルメス」と名付けられ今日に至ります。キルメス族の最後の一人は数十年前に亡くなり、民族は途絶えてしまったともいわれています。

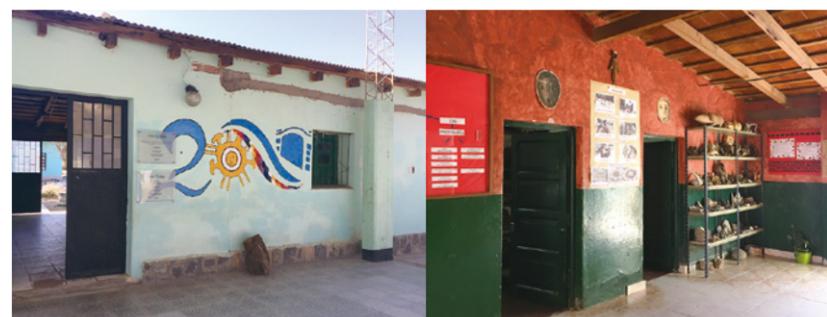
上: キルメス遺跡入り口。遺跡の背後は山に囲まれているため、スペインからの侵略者が侵攻した際の攻略には時間がかかったと言われている。
下: キルメス遺跡の内部。石で積み上げてつくられた壁で、家が設計された。かつて、このような家が山頂まで至るところにつくられていた。

地域のアイデンティティと学校

昨今キルメス地域では、地域の文化や先住民のアイデンティティを再考しようとする動向が生まれています。

今回のTURNの交流先の一つの学校 (School 217) では、土器や骨壺が発掘されたことを契機に、教師、子供の親、地元の職人や考古学者が協力して、歴史の再考と伝達を推進しています。

また、虹の7色の正方形で構成されるシンボル「ウィパラ」も大切に発信されています。南米アンデス地方のある先住民の旗に由来し、今日においては南米の先住民族の団結を示すシンボルとして使われるようになりつつあるそうです。7つの色にはそれぞれ、文化、宇宙などの意味が込められており、それらが組み合わせることで、アンデスの地理的、民族的多様性やコミュニティの共存システムを示しています。

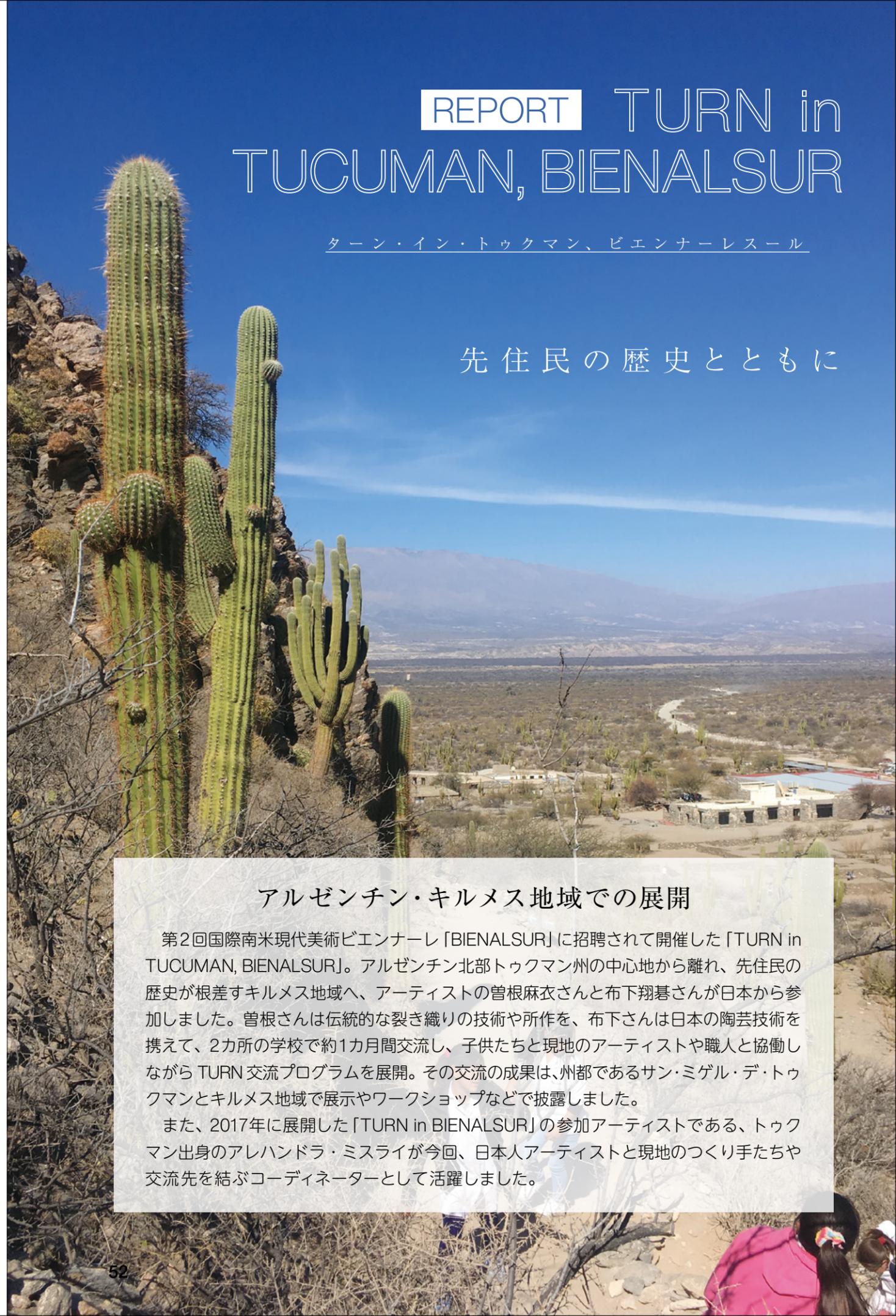


① 交流先の学校 (School 213) の壁画。ウィバラやスリ (この地域に生息する動物) など伝統的な模様が描かれている。 ② 学校 (School 213) に通う高校生グループが丁寧に教えてくれたもの。竹ひごと糸でつくる、ウィバラとアルゼンチンの国旗。 ③ 交流先の学校 (School 217) のなかに最近併設された、地域の歴史を物語る小さな美術館。学校の敷地から出土した土器や骨壺などが展示され、キルメスの先住民族にまつわる生活や視点に触れることができる。 ④ 学校 (School 217) の校内の廊下。学校内の至るところに、出土品が飾られている。 ⑤ 学校 (School 217) の外観。外壁にはカラフルでユニークな絵がたくさん描かれている。アルゼンチンの国旗色である白と青を基調としたものが多い。

REPORT TURN in TUCUMAN, BIENALSUR

ターン・イン・トゥクマン、ビエンナーレスール

先住民の歴史とともに



アルゼンチン・キルメス地域での展開

第2回国際南米現代美術ビエンナーレ「BIENALSUR」に招聘されて開催した「TURN in TUCUMAN, BIENALSUR」。アルゼンチン北部トゥクマン州の中心地から離れ、先住民の歴史が根差すキルメス地域へ、アーティストの曾根麻衣さんと布下翔基さんが日本から参加しました。曾根さんは伝統的な裂き織りの技術や所作を、布下さんは日本の陶芸技術を携えて、2カ所の学校で約1カ月間交流し、子供たちと現地のアーティストや職人と協働しながら TURN 交流プログラムを展開。その交流の成果は、州都であるサン・ミゲル・デ・トゥクマンとキルメス地域で展示やワークショップなどで披露しました。

また、2017年に展開した「TURN in BIENALSUR」の参加アーティストである、トゥクマン出身のアレハンドラ・ミスライが今回、日本人アーティストと現地のつくり手たちや交流先を結ぶコーディネーターとして活躍しました。



布下翔基 × School 217

「こねて、混ぜ合う」

布下さんは「人は土から生まれ、土に還る」という考え方をもとに企画を展開しました。まるで亡くなった人々の魂を集めるかのように、ブエノスアイレスのキルメス地区から、先住民族が暮らしていたキルメス地域までの土を採取し、地域の人たちと土を混ぜ合わせ、粘土をつくりました。日本古来の土づくりの技術を用い、地域の子供や職人によって形づくられた「歩く人」。それらを展示したトゥクマン市内の美術館は、ブエノスアイレスのキルメス地区からキルメス地域まで、「歩く人」が戻ってきた場になりました。そしてキルメス地域でのワークショップ最終日で生まれた「歩く人」は、キルメスの民が暮らした丘を駆けのぼった子供たちによって、ついに頂上にたどり着きました。

① 生徒と現地の伝統工芸の職人たちと行った「歩く人」の制作。滞在した季節は秋。気候はとても穏やかで、毎日屋外で制作を行っていた。② 生徒たちとの土づくり。ブエノスアイレスからキルメス地域までの道中と学校周辺、合わせて16カ所で採取した土を混ぜ合わせた。③ 野焼きの様子。日本のスタイルのほかに、羊や牛の糞を燃料にする現地の方法でも野焼きを行った。④ キルメス地域での展示の様子。人々が歩いている先にある窓からは、キルメス遺跡が見えている。⑤ 窯出しの様子。校内の小さな窯でも焼成を行った。この窯を使用した焼成では、地域の陶芸家が協力してくれた。



TURN in TUCUMAN, BIENALSUR 開催概要

TURN交流プログラム 期間：2019年6月3日(月) - 21日(金) 場所：School 213 / School 217(ともに学校)

展覧会 期間：2019年6月29日(土) - 8月18日(日) 場所：Timoteo Navarro Museum (州都サン・ミゲル・デ・トゥクマン)

ワークショップ 期間：2019年8月25日(土) - 31日(日) 場所：The ruins of Quilmes Museum (キルメス地域)

主催：国立大学法人東京藝術大学、東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人 Art's Embrace
共催：トレス・デ・フェブレロ大学 (BIENALSUR 事務局)



曾根麻衣 × School 213

「紡いで、織り込む」

うちわの骨組みを織物の縦糸に見立て、横糸の代わりに古着や使わなくなった布を裂いて横糸として使う裂き織りの技術で制作した曾根麻衣さん。その技術をもとに、現地の小学生と伝統工芸の職人たち一人ひとりがうちわを制作しました。日本の着物や浴衣の古布と、アルゼンチンの布、そして地域で紡がれる羊やリヤマの毛糸。地域に自生する植物で毛糸を染める草木染ワークショップも、職人たちの協力のもと学校で開催しました。一つのうちわに、日本とアルゼンチンそれぞれの感性が織り込まれています。最終的には、色とりどりの「裂き織りうちわ」の最初の糸と最後の糸をみんなで結び合い、一つの大きな輪が生まれました。

① 現地の伝統工芸の職人たちとのワークショップにて。② 裂き織りに使う糸の裂き方をレクチャーする曾根とアレハンドラ。子供たちは興味津々。日本の着物と浴衣は取り合いに！③ キルメス遺跡での展示風景。裂き織りうちわの森。久しぶりにうちわと再会した子供たちが、この森のなかで写真をたくさん撮っていた。④ 最終的に三つの地域の職人との交流が行われ、最終日には全員が集まって、うちわを一つの輪に。この日は、村の人たちがパンやジュース、マテ茶を持ち寄ってくれてミニパーティー。



コーディネーター

アレハンドラ・ミスライ

1981年、アルゼンチン・トゥクマン生まれ。アーティスト。レース編み「ランダ」を基軸に、様々な素材とそれぞれのアイデンティティの構築をテーマの一つとしている。

参加アーティスト

布下翔基 (ぬのした・しょうご)

1990年、広島県生まれ。東京藝術大学博士課程に在籍し工芸を学ぶ。やきものと漆を専門に扱い作品を制作し、素材の魅力を伝える活動を行っている。

曾根麻衣 (そね・まい)

1993年、静岡県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻に在学中に中南米のグアテマラで1年間織物を学び、現在は東京を拠点に旅をしながら制作活動を行う。

八百屋や子ども食堂から、 「生きていて楽しい」を広げるために

近藤 博子 [気まぐれ八百屋だんだん店主]

地域のコミュニティスペース「気まぐれ八百屋だんだん」を運営する近藤さん。歯科衛生士として子供たちの歯を診ていたころ、子供の食が脅かされている危機を感じ、子供の居場所と「子ども食堂」をはじめた。その頃から通っていた小学生はいまや大学生になり、TURNではアーティストの永岡大輔さんと一緒にイベントの企画や運営を担っている。そして、TURNに参加する近藤さんの思いとは。

アーティストという職業と、おとな図鑑
—2016年からTURNに参加され、アーティストの永岡大輔さんと一緒にこれまで「おとな図鑑」(※1)を開催したり、「だんだんHEKIGAプロジェクト」(※2)を開催してこられました。TURNにはなぜ参加されたのでしょうか。

TURNのお話をいただいた当初は、「子ども食堂」の時間にアーティストが来て子供と一緒に何かをつくる、という予定でした。アーティストは永岡大輔さん。何回か打ち合わせをしてアニメーションをつくるのはどうだろう、となりました。実際に「子ども食堂」に永岡さんがいらつしたのですが、現場の雰囲気からアニメーションづくりは難しそう、と臨機応変に判断されて、その日は食堂のお手伝いをしてもらいました。そのあと、永岡さんの「球体の家」をつくる夢を子供たちと一緒に話したり、TURNフェスに参加したり、とできることを少しずつやっていきました。

「気まぐれ八百屋だんだん」(以下、だんだん)は、現在TURN LANDとして参加しています。TURN LANDの目的でもある「地域にひらく」ことは八百屋としてオープンした当時から取り組んでいました。だんだんは2008年にオープンし、翌年から補習塾「ワンコイン寺子屋」や、学校帰りに宿題ができる無料スペース「みちくさ寺子屋」を始め、「子ども食堂」は2012年からです。ただ、ここだけがひらかれていても、ほかの場所もオープンでなければ意味がないとは思っていました。たとえば、だんだんに来る子供たちのなかには障害のある子供もいますが、その子供たちが大人になって通う場所は、閉鎖的であってほしくないなど。障害のある人たちが地域で暮らし、自立をしていくためには、日頃から地域とのコミュニケーションが大事です。私は歯科衛生士の仕事で福祉施設に行くことがありますが、そして子供にも自分の生き方を自分で選んでほしい。それを伝えていきたい、というのが「おとな図鑑」です。

期限は成果を抑制する?
—「おとな図鑑」に関わる大学生のなかには、だんだんの常連だった子供たちもいます。それだけ子供たちにとって、だんだんは居心地の良い場所なのですね。

彼らにとっては「勝手知ったる我が家」みたいなところもあると思います。ですが良い場所かどうかは子供たちにはわかりません。結果が出るのも、もっと大人になったときでしょう。それもいつになるかわかりません。でも子ども食堂やみちくさ寺子屋などを通して、何年も同じ子供に関わっていると、発達障害の子供が就職してお手伝いに来てくれたり、自閉症の子がある日、目を見て話してくれるようになったり。そうした変化を見ると、人は人との関わりのおかげで生きているのだなというのを自覚できます。

でもその変化は助成金の報告書のように、「何日までに報告書を出してください」というものではないのです。いつまでこんな状態ってほしいと思ってもそのとおりにいかない。だから、私は期限付きのものにあまり挑戦しません。期限が決まっていると、どうしてもストップをかけなければいけない。でも、期限がなければもう少し達成できたかもしれない。臨機応変さがなくてこうした仕事はなかなかできないと思います。ただ一方で、私はいつでもやめていい、と思っかけてやっています。無理して続けて疲弊するより、「だめだった」とやめる選択もありだと思ふ。うちがなくなっても東京にはいくらでも次があるから大丈夫。そう思っているからこそやっけていられる

設に行くことがありますが、閉鎖的な施設が多いです。とても精一杯で、自ら新たなアクションを起こす余裕がないのだと思います。それならば、外から何か持ち込むのはどうか。そこに、私がTURN LANDでできることがあるのかな、と思うようになりました。小さいアクションですが、永岡さんと企画している「おとな図鑑」では、私たちが施設のホールを借りています。すると、おとな図鑑に来た人が施設の存在を知る。そういう人が一人でも増えることで、何か変わるのではないかと思うのです。

—おとな図鑑では永岡さんも企画者となって、近藤さんや子供たちと一緒にイベントを運営していますね。近藤さんから見て、永岡さんはどのような人ですか。

ひょうひょうとしているけれど、さまざまな経験を繰り返して、ここまで来られてきた人です。経済的な部分ではない幸せについて、本当の人間らしさについて、そして子供たちに伝えたいという思いなど、自分と価値を共有できることが多く、そういう方と一緒にプロジェクトができることが嬉しいのです。最初、「アーティスト」ときくと私たちとはかけ離れた考え方をしている人、というイメージがありました。でもそうではなかった。永岡さんは困難のある人や大変な生活に関わりながら活動されていて、すごく思いがある方です。アーティストは生活に密着した面白い職業だと思っています。そういう職業を子供たちにも知ってほしいという思いで、「第5回おとな図鑑」でも永岡さんに話してもらいました。

アーティストのような職業もそうですが、子供の選択に対して「そんなもので食べていけないだろう」と反対する親もいると思います。でも、ほかのことで稼ぎながらやりたいことをやるという生き方もあるし、いろいろな道があるはず。偏差値の高い学校を卒業することが全てではなく、この子にとって本当にいい生き方は何かを一緒に考えてい

のかもしれない。人って必ず次を見つけることができるんですよ。

—近藤さんの活動には、だんだんを起点に、地域やそのほかいるいるな世界へと子供たちの活動を広げていきたいというお気持ちを感ずります。今のTURNでも、ここからつなげていきたいという思いなどはありますか。

自分だけ良けりゃいい、という考え方は良くないと思っています。うちから発信したり、何かをやったりすること、ほかも良くなると、それがまた次にもつながるといいなと。いろんなところに点々と広がって「生きていて楽しい」と思う気持ちが広がってほしいです。それがネットワークなのではないでしょうか。その活動としてTURN LANDの可能性があるのかもしれない。[構成]佐藤恵美

1 — 「おとな図鑑」学校や家庭など普段の生活ではなかなか出会えない生き方・働き方をしている人をゲストに招き、話を聞いたりワークショップを行うイベント。

2 — 「だんだんHEKIGAプロジェクト」だんだんでボランティア活動を行っている学生チームが中心となって企画を考え、地域の子供たちと一緒にだんだんの外壁に絵を描くプロジェクト。

近藤 博子 (こんどう・ひろこ)



1959年生まれ。歯科衛生士のかたわら、有機野菜や自然食品を扱う八百屋「気まぐれ八百屋だんだん」を営む。2012年より全国に先駆けて、子供が一人でも安心して食べにえられる「子ども食堂」を始めた。第47回社会貢献者表彰受賞。



Female Drag Queen でパフォーマーのマダム ボンジュール・ジャンジを迎えた「第4回 おとな図鑑」。第3回からはだんだんに通っているボランティアチームも企画に関わった。



気まぐれ八百屋だんだんの壁に、子供たちと絵を描いた「だんだんHEKIGAプロジェクト」。右は永岡大輔さん。

写真=鈴木竜一朗

傷つきが、出会い、循環する場をひらく

長津結一郎

〔九州大学大学院芸術工学研究助教授〕

小さな声を聞き逃さないこと

空、今日とか超快晴じゃないですか。

僕は空を見て、「気持ちいいな」って思うんですけど、ある取材で、「別に気持ちいいって思わない」と言われて、結構それは衝撃で。このスカッとした青空を見ても、気持ちいいって思わない人もいる。「当たり前」の数は人それぞれあるということ、自分のなかで、日常のなかで忘れないようにしたいなと思っていて。

自分というものがあがりながら、でも目の前は自分ではないから、自分が思う当たり前は必ずしも通じるわけではないという前提で、通じる部分があったらより良いというのを日々模索しているんです。

——犬童一利「映画監督」(TURNフェス5、ゼミ1「ことばをつくる」より(※1))

前号に掲載の(前編)では、「もうひとつのTURNはどこにあるのか」と問い、わたしたちの居場所をつくることについて考えた。この(後編)では、2019年8月に行われた「TURNフェス5」の会場、私が「ゼミ」と称して行った対話の場での発言をたどり

つつ、「より小さな声を聞き逃さない」ということについて、もう少し考えてみたい。

僕の歌人としての仕事では、短歌を広めることと、あとはゲイであることをオープンにして、社会的にもセクシュアル・マイノリティが認められるような社会を目指したい、と思っっています。でもそれを全部同時にしようと思うと、それはかなり難しいものがあるんです。そのため、たとえば「今回は思いっきりゲイの方に振り切ろう」と、『ゲイだけど質問ある?』っていうタイトルのエッセイを出版したり。歌集をつくるときは、もつと俯瞰で自分をとらえた、人間としての僕をきちんと表現しよう、と。表現の仕方その都度変えながら模索しています。

——鈴掛真「歌人」(TURNフェス5、ゼミ1「ことばをつくる」より)

「TURNフェス」は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に伴う文化プログラムの一環として実施されている。パラリンピックは言うまでもなく、障害のある人の、ある種の「エリート」の祭典である。オリンピック・パラリンピックを「文化の祭

スが機能してしまうという危険性もあるのではないかと感じられた。

平田オリザの言葉を借りれば、「みんな違って、みんないい」ではなく、「みんな違って、たいへんだ」(※2)。だとすれば重要なのは、その大変さに対してほんやりと見つめて忘れていくのではなく、そこに向き合おうとする視点であり、そのことを通じて自分のあり方を考え直すという視点であろう。

「協働」の多様な側面と、「わたしたちの居場所」

技術が民主化されたことでできる範囲が広がっていくつも、結局は「自分はこのままでやって」「他の人と一緒に何かやる」ところの境界が、より明らかになってきたのかなと思います。そこで初めて自分が持っていた技術の解釈が、また他者とのコミュニケーションによって変わってくる。相対的に見た自分のスキルと、自分が発揮しているスキルとは違う。その境界が見えてきた。

——金箱淳一「神戸芸術工科大学助教」(TURNフェス5、ゼミ2「ものをつくる」より)

他者に対する協働のまなざしは厄介だ。時に他者との協働により自らの視点を広げ、そのことがひいては他者のありようもまた変えることがある。その一方、協働が無自覚に他者を殺めることもある。協働が、誰かを、殺す。

それに対抗することこそが、文化の役割なのではないかとも思える。殺されてしまった声、殺されるかもしれない声を聞くことや、その聞くという行為そのものから始める何かを、丁寧に見つめること。社会包摂

を願うプロジェクトであればあるほど、その視座が求められているような気がしてならない。

かつては犯罪被害者の遺族、しかも未解決事件の遺族である私が、不特定多数の方々に発信を求められたとき、ある程度受け取りやすい物語として提示せざるを得ませんでした。ある程度いい話をしてしまっていたんです。犯罪被害者遺族の枠組みからは「正義」のスタンスでの発信以外、受け取られにくい現状があつて、つい、こちらも構えてしまったんですね。私が伝えたのは「グリーンケア」のメッセージです。悲しみは、解消しキュア(cure)することはできないから「グリーンケア」。悲しみとともに生きていくこと、「悲しみの水脈」でつながっていくことなんです。そのためには、構えた発信じゃなくて「弱さ」「困りごと」の発信の方がずっと伝わりやすいことに気がつきました。困っているときに「助けて」と言い得る社会であってほしい。「聴く」ことから「他人事」が少しずつ「自分事」になっていくんだと思います。

——入江杏「ミシユカの森主宰」(TURNフェス5、ゼミ3「じぶんをつくる」より)

いくつかのプロジェクトが同時並行で行われるブースを回覧しながら私は、2020年以降にも社会的基盤として根付いていくことを目指すTURNだからこそ、生まれ得たものは何だろうか、ということについて思いを馳せていた。他の類似するイベントや取り組みを単にキュレーション、もしくは寄せ集めたというだけではない、この場だからこの行為。TURNフェス5のなかでのそのような視座、換言すると、「わたしたちの居場所」となり得たかもしれない瞬間が、

複数みられたように思われたのは希望だった。

例えば大西健太郎と宮田篤は板橋区立小茂根福祉園とのコラボレーションにより、展示している時間全体を使った参加型パフォーマンスを展開した。部屋全体を薄暗くし、井川丹による音楽とともに、来場者とともにパフォーマンスを通じて「影」をつくる。来場者といってもほとんどは小茂根福祉園の利用者とその職員のように見受けられ、東京都美術館の一室にまるで福祉施設がそのまま移設したような集合体であった。場やそこで行われる行為に関する当事者意識に目を奪われた。

同じく空間全体を使った展示をしていた富塚絵美も抜きん出ていた。あるひとりの盲ろう者へのリサーチをもとに、彼がどのように世界を感じているのかを手がかりとした空間をつくりあげた。洗濯物をつるし、扇風機を展示室のいくつかの場所で回すことで、その触覚や嗅覚を通じて位置を知るための手がかりになっている彼の感覚を、手触りのよいクッションやベッドに座りながら追体験する。たったひとりへのまなざしから作った包摂的な空間が広がっていた。

つながりから生まれる表現

僕がFab(持たざるものに力を与えるための民主化された技術の総称)に可能性を感じているのは、現実の道具をつくりながら、未来をどうしたいのかを思索する共同体が重要だと思うからです。たとえば政治や経済などに対して、自分が造形できないという感覚、つまり無能感や造形不可能性のようなことが、イデオロギーに大きな影響を与えているのではないかと思っています。でも、もしかしたら今つくっている

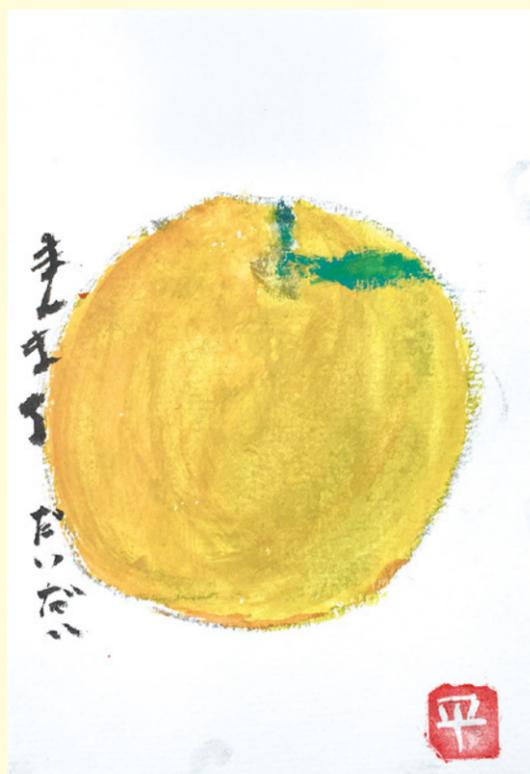
桃三 ふれあいの家

今号の絵手紙

東京・西荻窪にある高齢者在宅サービスセンター、桃三ふれあいの家。2018年からアーティストの伊勢克也が通い、交流を続けている。その桃三ふれあいの家で生まれた、数ある絵手紙作品のなかから、伊勢が2枚を紹介する。



何の花ですかね、淡紅が滲んでるのが良いですね。それに沿うような少し濃い墨色の線。完全に力の抜けた線なのだけど、割とリアルに枝を感じる。この絵の中でそこだけ意思や方向があって、いい塩梅で画面を斜めに横切っている。うーん、素敵だ。あれ、ちょっと待て。花じゃないのかな？ どこかの水辺の風景にも見えてきた。桜の花が水面に映っているじゃないか。え、お団子にも見える？ 桜餅か？ ま、そんなこと全てが春のやわらかい日ざしの中にある春の絵だ。



橙が大きいまん丸にある。それを画面のほぼ真ん中に大きく1個、まん丸に橙色で描いてある。橙のヘタには、切り取った時に残った茎と葉っぱが1枚。緑色で直角に、それも時計の針で言うと3時の位置。いや、12時15分か？ まん丸の橙に直交する。その横に「これ、本当にまん丸で橙色の橙なんだよー、それもデカイー」と、「まんまる だいたい」と窮屈そうな字で墨書されている。他に何か？ と言わんばかりの見事なまん丸な橙の絵。参ったよ、平澤のおっちゃん。

選・文||伊勢克也

桃三ふれあいの家 (ももさんふれあいのいえ)

杉並区立桃井第三小学校の一角にある、高齢者在宅サービスセンター。認定NPO法人ももの会が運営する。毎日30人ほどの高齢者が通い、絵手紙や俳句、囲碁、麻雀、書道、謡曲などを楽しんでいる。

その道具の力で、未来を変えられるかもしれない。未来を思索しながら現実の道具をつくり直す。それを何回転も繰り返すことに小さな共同体であっても未来を造形できる権利がある、それを実感できる可能性があるのではないかと。

—— 島影圭佑 [OTON GLASS / FabBiotopie 主宰] (TURNフェス5、ゼミ2「ものをつくる」より)

見本市のようにあれこれと並ぶ空間の、その隙間に、ふと息をつく時間がある。大西や富塚の空間のほかに、牧原依里ら東京ろう映画祭のメンバーによるワークショップでは、ろう者がマジョリテイとなる会話により映像制作のワークショップが開かれ、音声言語だけではない空間に立ち止まらされた。この空間の複数は、今回のTURNフェスにおける「Pathways 身のゆくみち」というタイトルに託された意図によるものである。

初日の夜に行われたパフォーマンスイベントについても同様に、複数性が現れた瞬間があった。陽気なサルサや、技巧的なヒューマンビートボックスに続き、福祉施設の日常を描いたラップのパフォーマンスと、どちらかといえば耳馴染みの良いパフォーマンスが続いたあと、最後に出てきたのが「ラブ・エロ・ピース」というバンドである。ボーカルを務める男性の声は言語障害もあって音程や歌詞は一度にはなかなか聞き取りづらい。もうひとりのボーカルははっきりと聞こえる一方、女装をしているようなのだが、舞台上ではそのことに関しての言及はまったくなく、キーボードを弾く女性の音は始終外れていて、そのポリリズムが全体のバランスに比べ大きいため、特に気になってしまふ。しかもベースやギター奏者(トーク)にも登壇した新澤克憲(ハリーモニー施設長)の合間を縫うように、独特なダンスを続けるおじさんがいる。それまでノリノリで聞いていた観

客も、この現象をどのように受け取ったらいのかとまどついている様子である。彼らが最後に演奏した曲の歌詞は、「死んでない、殺すな」と繰り返す。相模原障害者施設殺傷事件を経て作られたというこの曲は、障害者の社会的状況やその扱われ方について嘆き、怒る。彼らの定番曲だという。

ラブ・エロ・ピースには「笑ってる場合じゃねえよ、やまゆりの歌をちゃんと聞けよ」っていうメンバーもいれば、「拍手してもらって嬉しい」というメンバーもいます。一つの何かにまどついているような気がします。

自分の意図そのものは伝わっていかなくても、とりあえず、そこにおいて、何かを提示することによって、そこから全然違うところにいた人と人がつながっていく。さきほど入江さんがおっしゃっていた、「当事者だけが集まっている小さな場から、外に向かって広がっていく」という、そういうこと自体がすごく意味があるなと思って。相手がどう受け取るかはコントロールできないので、別にそこは勝手にやっつけていけばいいやって。

—— 新澤克憲「ハリーモニー施設長」(TURNフェス5、ゼミ3「じぶんをつくる」より)

他者に対する、深い協働のためのまなざし。そのまなざしのありようによっては、傷つき、傷つけ合う場が生まれる。そしてその傷つけ合いによって、関係の幅が良い方向にも、悪い方向にも広がることもある。ならば、包摂される側とされる人々や、その人々を守ろうとする人々は、そのような傷つきが循環しうる場

で、ささやかに、したたかに戦い続けることしかない。TURNのなかにあるかもしれないし、見えなくなってしまうかもしれない。もうひとつのTURNなるもの。それを探す視点は、社会のなかにいる自分にとっての障壁から身を逸らし、自らの「身のゆくみち」を孤独に開拓するという視点でもある。その孤独の根底につながっている、静かな、「悲しみの水脈」で得るつながりから生まれる表現を、突拍子もない音程を鳴らすキーボードの音色を思い出しながら、私は今も夢想している。

※1—— 本文における引用は、すべてTURNフェス5の「わたし」の場所を考えるゼミ「In/extension」のゼミ1より。実施2019年8月17日(土)10時~16時、場所東京美術館(TURNフェス5会場内)特設スペース。

※2—— 平田オリザ「わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か」講談社、2012年

長津結一郎(ながつ・ゆういちろう) アーツ・マネジメント、文化政策学、芸術社会学などをベースとし、障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行う。また近年は、芸術活動の担い手育成や市民創作ワークショップをフィールドとして、芸術文化の持つ役割についての考察を深めている。博士(学術・東京藝術大学)。著書に「舞台の上の障害者・境界から生まれる表現」(九州大学出版会、2018年)。

TURNミーティング

各分野で活躍するスペシャルゲストを招き、さまざまな視点からTURNを考察する「TURNミーティング」。2019年に開催した二つの回をダイジェストする。

写真=鈴木竜一朗

第8回TURNミーティング 未来を切りひらく 「コミュニケーションって!？」

日時 2019年5月12日(日) 13時30分～15時30分
場所 東京藝術大学美術学部中央棟1階第1講義室

登壇者

松田崇弥(ハラルボニー代表取締役、未来言語取締役)、
梶谷真司(東京大学大学院総合文化研究科教授)、
ライラ・カセム(TURNプロジェクトデザイナー)

「コミュニケーション」をテーマにした第8回。第一部では、松田崇弥さん、梶谷真司さん、ライラ・カセムがそれぞれの経験や活動を紹介しながら、多様な人との「コミュニケーション」についての考えを語った。多人数のルーツをもち、身体に障害のあるカセムは「異なる背景を持つ他者との新しいコミュニケーションの方法を探ることは、世界共通の課題である孤立の解消につながる」と発表。続く梶谷さんは、8つのルールに則ることで議論のハードルを取り払い、誰もが「自分の言葉」で発言する場「哲学対話」について、事例を取り上げながら既存のコミュニケーション観への疑問を投げかけた。最後に松田さんが、自閉症の兄の存在を起点に「ハラルボニー」を起業した経緯や、どんな人でも使える「100年先のコミュニケーション」の創造を目指す「未来言語」の活動について発表した。

第二部ではまず、前半に話されていた「カテゴライズ」の問題について議論を広げた。カセムは「社会や人との接点が奪われたとき、「問題のある子」や「障害者」というカテゴリーが生まれるのではないかと言及した。後半は、日比野を交え「未来のコミュニケーションに必要なことは」というテーマでトークを展開。「他者が自分の話を理解したのかは、究極的にはわからない。ただ傾いているだけでも対話は成り立つ。むしろ重要なのは「一緒にそこにいる」こと。人と交流をして『連う』と感ずることも、コミュニケーションの一つですよね」と梶谷さん。「車座になろう」という梶谷さんの呼びかけで一部の来場者がステージ前に集まり、オープンな雰囲気。さらに新たな試みとして、会話の内容をイラストを交えて、視覚的にまとめていくグラフィックレコーディングを行った。ミーティング終了後には多くの来場者が見直しており、描かれたグラフィックを見ながら、より深い議論が交わされていた。



右から、日比野克彦、松田崇弥さん、ライラ・カセム、梶谷真司さん

第9回TURNミーティング 人が集まる空間って どんな場所？

日時 2019年11月17日(日) 13時30分～15時30分
場所 東京藝術大学音楽学部5号館1階109教室

登壇者

安部良(建築家、藤岡聡子(福祉環境設計士)、
日比野克彦(TURN監修者)、
森司(TURNプロジェクトディレクター)

をつくるワークショップを行った際「コミュニティが見える場をつくるのが建築家の仕事ではないか」と感じたという。そこから香川県・豊島のコミュニティレストラ「島キッチン」やゲストハウス「nanna(まんま)」※にてさまざまな世代が集まり、複数の機能を併せもつ場所づくりを担ってきた。「一言で言えないものをつくりたい。遠くにある2〜3個の機能を一緒にすることをいつも考えています」と締めくくった。後半は、日比野と森を交えたクロストークを展開。「表現がマスに向かうと、緩いものになる。多目的を目指した場所が、結局誰にも使われないことはよくあります。そうではなく、具体的な人のためにつくると、誤解も生まれるけれど、それはその人自身の受け取り方で、じつは想像力に溢れてもいる」と日比野。するとトーク終了後、藤岡さんは「福祉の世界では『誰もが』という主語を使うことが多いけれど、匿名化せず解像度を上げないとよい場所はできない。よい場所とは『こういう場所がほしかった』と、一人ひとりのピースが埋まっていく場所」と話し、安部さんも「特別な誰かのためにつくられた場所でない、多くの人に特別さは感じてもらえない。そこが誰かにとつての特別な場所であれば、他の人にも伝わるのだと思います」と話した。「具体的な誰か」を想像する大切さが、改めて意識された回となった。

※元乳児院の豊島神愛館を再利用するプロジェクトの一つ。

建築家の安部良さんと、福祉環境設計士の藤岡聡子さんを招き、多彩な機能とさまざまな人が集まる場の可能性を伺った。まずは藤岡さんによるキーノートトーク。「なぜ老人ホームには老人しかいないのだろうか?」という問いから、まちに住む方たちの手芸や料理といった家庭の知恵、身体や介護のことを多世代が集まって学ぶ「長崎二丁目家庭科室」を運営した。自分の興味、関心事をきっかけに、集まった人同士で病気や障害についてオープンに話し合える場になったという。また2020年春に開業予定の在宅医療拠点「ほっちのロッヂ」の事例では、この場所を「ケアの文化拠点」と呼んだり、介護士を募集する際「医療福祉のクリエイティブ職」と名づけたりするなど、呼称や名付け方の工夫についても語った。

続いて安部さんが「コミュニティが見える場をつくる」と題し発表。東日本大震災で子供たちと未来のまち



右から、日比野克彦、安部良さん、藤岡聡子さん、森司

表紙のストーリー 交わるアート

表紙の作品が生まれたエピソードから



名前：りょうた(左)／こな(右)
年齢：26歳／23歳
好きな食べ物：パスタ(トマトと肉)／パスタ(カルボナーラ)
嫌いな食べ物：甘いものが苦手、ナス／しょっぱい系
これまでの人生で楽しかったこと：よみうりランドに行ったことと、2人でカラオケに行って歌ったり踊ったりしたこと(2人とも)
これまでの人生で寂しかったこと：こなさんの誕生日の日に限って、会社の人のクリスマスイベントがあり、(ダンスの練習へは行かず)遊園地へ行ってしまった／りょうたは、ダンスの発表会の最終練習があり、夜まで遊んでいるこなを迎えにしようとしたけれど、喧嘩になるのが嫌で迎えに行かずに、1人で泣いた
得意なこと：ダンス(2人とも)
苦手なこと：チームワークでコミュニケーションがとれないこと／算数
夢：付き合っている彼女と一緒に結婚して生活する／一緒に暮らすこと

Interview by Erika Kobayashi



好きなこと、大切な人

ささやかな日常のきらめき。移ろいゆく日々のなかで、そんな大切な瞬間を感じさせてくれる二人、こなさんとりょうたさんを描いたのは、作家の小林エリカさんです。

こなさんとりょうたさんが通う「アトリエ・エー」は、ダウン症、自閉症の子供たちを中心とした絵の教室として2003年よりスタート。写真家、デザイナー、イラストレーター、編集者、俳優といったさまざまな職業の人たちもスタッフとして参加しながらともに楽しく過ごす空間です。2018年からTURNの参加アーティストも交流を行い、TURNフェス5では、アトリエ・エーでの普段の活動を会場で展開しました。

小林さんは10年ほど前からアトリエ・エーと交遊があり、年に数回、参加しています。今回、本誌へのイラスト制作を依頼した際に生まれた提案が、アトリエ・エーに通う人を描くことでした。活動日の傍らで行われたヒアリングでは、絵を描きながら、好きな食べ物や楽しかったこと、悲しかったことなどの経験を聞いていきました。質問に対して二人は、これまでの経験を丁寧に思い起こしながら一緒に考え、そしてその様子からお互いを大切にしている関係性が伺えたことが印象的でした。

左下の絵は、こなさんとりょうたさんがヒアリングの日を描いたイラストです。二人で一緒に見に行った映画『きみと、波にのれたら』とサーフボードのことを思い浮かべながら、本誌のために描いていただきました。

文=畑まりあ

小林エリカ(こばやし・えりか)

作家、漫画家。目に見えない物、時間や歴史、家族や記憶をモチーフとして作品を手掛ける。著作には、小説『トリニティ、トリニティ』(集英社、2019)、三島由紀夫賞・芥川龍之介賞にノミネートされた『マダム・キュリーと朝食を』(集英社、2014)、放射能の科学史を巡るマンガ『光の子ども』(1-3巻、リトルモア、2013・2016・2019)などがある。映像、ドローイング、テキストを交えたインスタレーションも多数発表。個展に「野鳥の森 1F」(Yutaka Kikutake Gallery、東京、2019)、「His Last Bow」(Yamamoto Keiko Rochoix、ロンドン、2019)、グループ展に「話しているのは誰? 現代美術に潜む文学」(国立新美術館、東京、2019)など。



TURN

TURNとは、障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトです。これまでに約70名のアーティスト、約60の施設や団体が参加しています。年間を通して展開している多彩なプログラムをもとに、国内外で広くその意義を発信していきます。

主催 = 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
特定非営利活動法人 Art's Embrace、国立大学法人東京藝術大学

監修 = 日比野克彦 [アーティスト、東京藝術大学美術学部長・先端芸術表現科教授]

プロジェクトディレクター = 森 司 [アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長]

TURN公式ウェブサイト: turn-project.com



「Tokyo Tokyo FESTIVAL」とは、オリンピック・パラリンピックが開催される2020年の東京を文化の面から盛り上げるため、多彩な文化プログラムを展開し、芸術文化都市東京の魅力を伝える取組です。TURNは、その一環として実施しています。

Tokyo Tokyo FESTIVAL 公式ウェブサイト: <https://tokyotokyofestival.jp>

TURN JOURNAL

SPRING 2020 — ISSUE 03

2020年3月23日発行

監修 = 森 司 [アーツカウンシル東京]

編集 = 畑まりあ [アーツカウンシル東京]

田村悠貴 [特定非営利活動法人 Art's Embrace]

佐藤恵美

デザイン = 星野哲也

印刷 = アトミ

発行 = 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階

TEL: 03-6256-8435 / FAX: 03-6256-8829

Email: info@turn-project.com

URL: www.artscouncil-tokyo.jp

©2020 Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved

「TURNフェス2020」開催！

今夏に、6年間の集大成となる大規模なイベント「TURNフェス2020」を、国内外のアーティストや多様な施設、団体と協働しながら複数会場で開催します。

期間：2020年7月～9月

詳しくは、特設ウェブサイトをチェック！
<https://turn-project.com/fes2020>

文化
オリンピック

